世界歷史譚第二十二編

# 那破翁

文學士土井晚翠著

博文館藏版

世界歴史譚第二十二編

# 破邪翁

文學士土井晩翠著

大和田建樹君著

毎編著名畫伯挿繪

# 日本歴史譚

全部廿四册　菊判洋裝美本　彩色表紙

## 全部完成

日本歴史譚

日本歴史譚は國文學者として有名なる大和田建樹先生が我邦古來より現今に至るまでの歴史中最も著名なる事蹟にして幼少年諸君の忠君愛國の思想を養成せしむるものを選び平易流暢の筆を以て記述したるものにして全編二十有四編皆此れ金玉の文にして幼少年諸君座右の友として立志の端を開き兼て歴史を知らしむ實に破天荒の珍書なり

定價前金

金壹册金八錢郵税壹册二付四錢
金四拾五錢金六册
金壹圓廿四册金五錢八拾
金六拾錢

第壹編　日本開闢……山田敬中畫
第貳編　畝傍山……村田丹陵畫
第三編　三韓征伐……寺崎廣業畫
第四編　聖德太子……水野年方畫
第五編　菅公……梶田半古畫
第六編　九郎判官……筒井年峯畫
第七編　曾我兄弟……尾形月耕畫
第八編　惡七兵衛……水野年方畫
第九編　相模太郎……山中古洞畫
第拾編　楠公……小林永興畫
第拾壹編　日蓮……武内桂舟畫
第拾貳編　大塔宮……歌川國松畫
第拾參編　豐太閤……小堀鞆音畫
第拾四編　七本鎗……筒井年峯畫
第拾五編　關ヶ原……高橋松亭畫
第拾六編　水戸黄門……水野年方畫
第拾七編　四十七士……中川蕙舟畫
第拾八編　平田篤胤……遠藤耕淡畫
第拾九編　櫻田門外……小峯大羽畫
第貳拾編　七卿落……池田輝方畫
第廿一編　彰義隊……小山光方畫
第廿貳編　城山……宮川春汀畫
第廿參編　平壤……永井寸昌畫
第廿四編　威海衛……小山光方畫

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

世界歴史譚
第貳拾貳編

# 那破翁

## 目次


第一　少年時代……一
第二　將軍時代……一五
第三　執政官「ナポレオン」……二九
第四　皇帝「ナポレオン」……三九
第五　同盟軍……八三
第六　復位……九四
第七　「オーターロー」……一〇〇

附　錄

馬前の夢（新体詩）……一二三

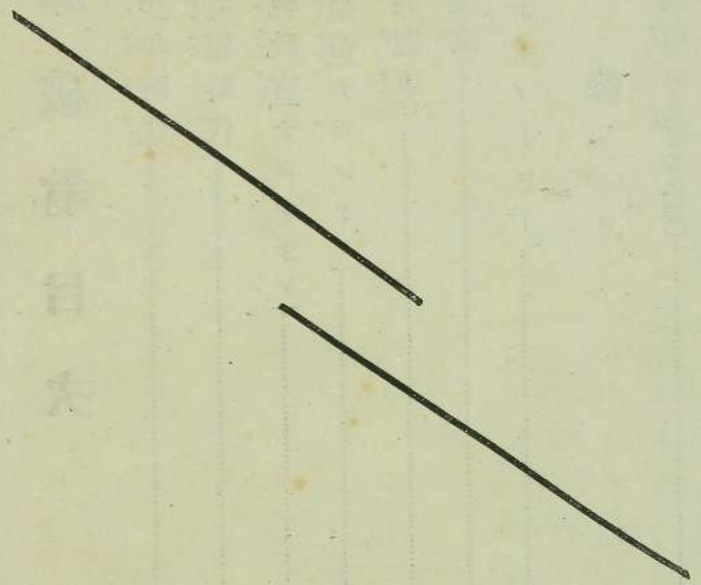
世界歴史譚
第貳拾貳編

# 那破翁

文學士 土井林吉 著
中村不折 畫

## 第一 少年時代

今古悠々五千年、東西茫々一萬里、此間英雄武將の輩出少しとせず、しかも峻嶺雲を凌て群丘を俯視する如く洋海蒼波を湛て川流を呑下するが如く、風雲の會に乘じ、大名を宇宙に揚げて百代の豪傑を藐視するもの、西にありては「セイザア」あり、「アレキサンダア」あり、東にありては成吉思汗あり「タメルラン」あり、豐太閤あり、然れども彼等其時代は舊く其事績は邈たり、獨り十九世紀の



文明時代に現れ、身を貧士官に起し、駭絶の天才駭絶の勇氣駭絶の精勵を以て遂に萬乘の皇位に上り全歐の覇權を握りて人生の光榮を窮めたるものはわが「ナポレオン、ボナパルト」に非ずや。『高山は仰視すべし、蒼海は俯瞰すべし、絶大英雄の事業は欽慕すべし、區々たる一小册子、只千古英雄の面目の萬一を髣髴せしめて少年子弟が學窓研鑽の餘暇に供するのみ、もし全豹を窺はんと欲するものあらば、今日歐米に彼に關せる百千無數の書ありて殆んど「ナポレオン文學」を搆成す、就て詳悉に學ぶを得べき也』

「ナポレオン、ボナパルト」は西暦一千七百六十九年地中海中「コルシカ」島内「アヤチオ」市に生れたり、父は「チャーレス、ボナパルト」と呼べる同島古來の豪族、母は「レーチ、アラマリノ」といへる才貌雙全の賢夫人也「ナポレオン」が幼時より非凡の性を有せしことは知





人の注視する所なりしと見え、一人の遠戚「アヤチオ」市の僧たりしもの其臨終の際「ナポレオン」兄弟を床前に呼び、遺言して曰らく「ヂョセブ」(兄)汝は長男なり、されど「ナポレオン」は一家の首領也汝等よくわが言を記せよと言了りて絶せりと曰ふ。

「コルシカ」島は素獨立國なりしが當時佛蘭西人に攻められ、抵抗苦戰の後、力遂に屈して其屬領となれり、是に於て父「チャーレス」も亦佛の王民となり、後ち代議士に選ばれて佛の本國に行きしが、其際「ナポレオン」を拉して、官許を得て「ブリアンヌ」兵學校に入らしむ「ナポレオン」時僅かに十歳。

始め彼佛蘭西語に通ぜず又從來干戈を擧げて佛國に抵抗し頃日漸く歸服せる新領土の出なるを以て「ナポレオン」は他の腕白生徒等の注目する所また隔意する所となり、是際より自ら人嫌

ひをなして幽獨を愛する習慣を養成するに至れり、然れども此事能く彼が勉學を介けしは疑を容れず、彼は何等の嬉戯に加はらずして沈默精勵、諸學中殊に數學に長じ、又地理歷史を好めり、思慮精密にして小事を忽にせざる性質は、思ふに此數學研究に因て大に養育せられしなるべし、「コルシカ」にありし日より彼は史傳を嗜好し、特に「プルターク」の英雄傳を熟誦したりき、想ふに其炯々たる眼光羅馬希臘の英雄傳記を照して、或は春陽花薫ずる處、或は秋夜燈細き時、胸裏に古人の英姿を描き、其鴻業偉略を欣慕して肉震ひ胸躍るを覺へざりしならん、人主の少時に受けし感銘は容易に磨滅すべからず、偉人の傳記を誦して其功勳を慕ふは小兒の精神を剛强ならしむるに尤も力あり、「ナポレオン」一代の英略其萠芽はこゝに存せずと曰はんや、五年にして彼は





「ブリアンヌ」より「パリ」の兵學校に轉ずべき齡となれり、視學官ケラリオ「國王「ルイ」十六世に奉りし報告は左の如し、

「ボナパルト」(ナポレオン)一千七百六十九年八月十五日生れ、身長四「ヒート」十「インチ」、第四級在學、體格良好、健全人に勝れ、溫順正直能く恩に感じて擧動整齊、數學の勉强特に著るし、歷史地理に善し「ラテン」語は拙なり、他日好き海軍兵とならむ、「パリ」兵學校に轉ずしむるに足る、

「ナポレオン」年十五「パリ」兵學校に入りて校則の過寛なるに慨し、特に生徒に驕奢の風あるを坐視する能はず、副校長「バルトン」に書を送りて之を痛論したり、中に曰ふ生徒をして僕を蓄へしむるを禁じ、學業を阻礙せずして、同時に自ら奉ずる習慣を作らしめざるべからず、節儉の生を送りて自ら奉ずるを學ばゞ、身體又

強健にして風雨に忍び、飢渇に堪へ、能く部下の兵卒の尊敬を買ふに足るにあらずやと、十五年六ヶ月なる少年の語宛然として老成將官の口吻なり、其後二十年にして皇帝「ナポレオン、フオンテンブロー」兵學校を創設せり、

一千八百八十五年良好の成績を以て卒業せる「ナポレオン」は『ラヘール』聯隊の二等尉官となり「クレノーブル」に留まり暫くして『ヴレンス』に移る、猶貧なりしかど家族を助くべしと思ひ、弟「ルイ」(兄より少きこと九年)を佛國に呼び迎ひ、共に「グランド」街四番地「ボン」夫人の家に下宿して、毎朝早く弟に數學を教へぬ、一日「ルイ」容易に覺めず、兄杖を床に突きて之を起し、汝甚だ怠惰なりと叱しけるに、少年答へて曰く『余は今朝快夢を視き』、兄曰く『何の夢ぞ』曰く『余が王となれる夢なり』曰く『然らば余が皇帝たれる夢か咄』





斯くの如くして未來の皇帝は日々未來の王に科程を授けたりき、

下宿の向ひに書店ありしが、兵營の務と弟の教育との餘暇に、「ナポレオン」は勉めてこゝに讀書せり「三年間我彼の書を讀みぬ、我職務と些の關係なきことすら少しも忘れず」とは「ナポレオン」が後年「エルフルト」に於て列國の君主と會議の折の餘談也、

一千七百九十二年「パリ」に呼び戻されしが怏々志を得ず、校友「ブリーアン」と共に種々の計畫をなせしが皆成らず、二人一日某街の料理店に將に朝餐を終らんとせしとき、街頭俄に騒がしく『國民萬歳』の聲を放ちて數千の亂民「チユーレリイ」の王宮に進まんとす、二人之に追從して進めば王宮の窓開けて國王「ルイ」十六世亂民の贈れる赤帽を戴きて立てり、嗚呼是れ佛蘭西大革命の慘

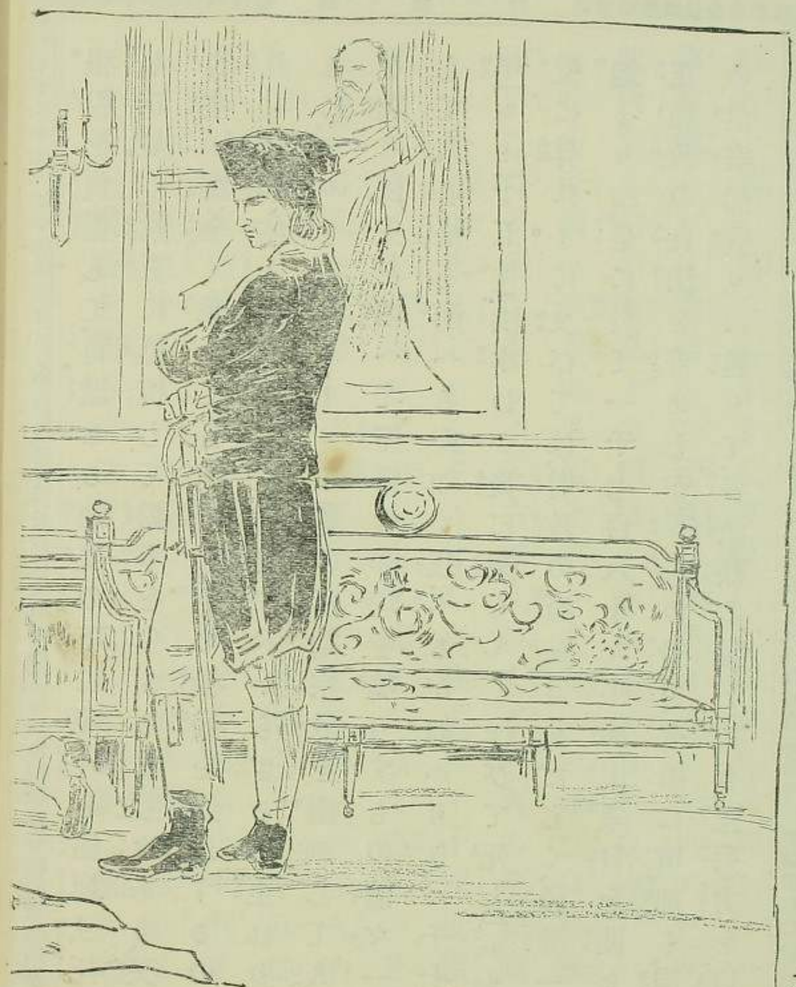
劇漸く熟し來らんとするの徴にあらずや、請ふこれより少しく筆を轉じて此空前の大變亂を略述せん「ナポレオン」の生涯は佛蘭西大革命の變亂より醞釀し來るものなれば也、

瞬時の降雨は洪水の汎濫を致さず、火山の爆烈は地底猛火の大作用ならずんばあらず、近古無比の大慘劇、夫の佛蘭西の革命なるもの、其由來久しからずとせんや、往古「ルイ」十四世縱に士民の産を奪ひて遊縱度なく、而かも又此金を以て盛大の建築公館を造り、又外國と長時の大戰を起して之に勝ち、やゝ人心を慰めしも、空中樓閣は遂に霧散せざるを得ず、嗣王「ルイ」十五世の代に至りては驕奢遊逸益甚だしく、官吏は私を營み自ら利するを事として財の用法を士民に知らしめず、古來佛國は貴族と僧侶と平民との三階級を別ち、前二者は坐食して富貴に傲り、第三者獨り



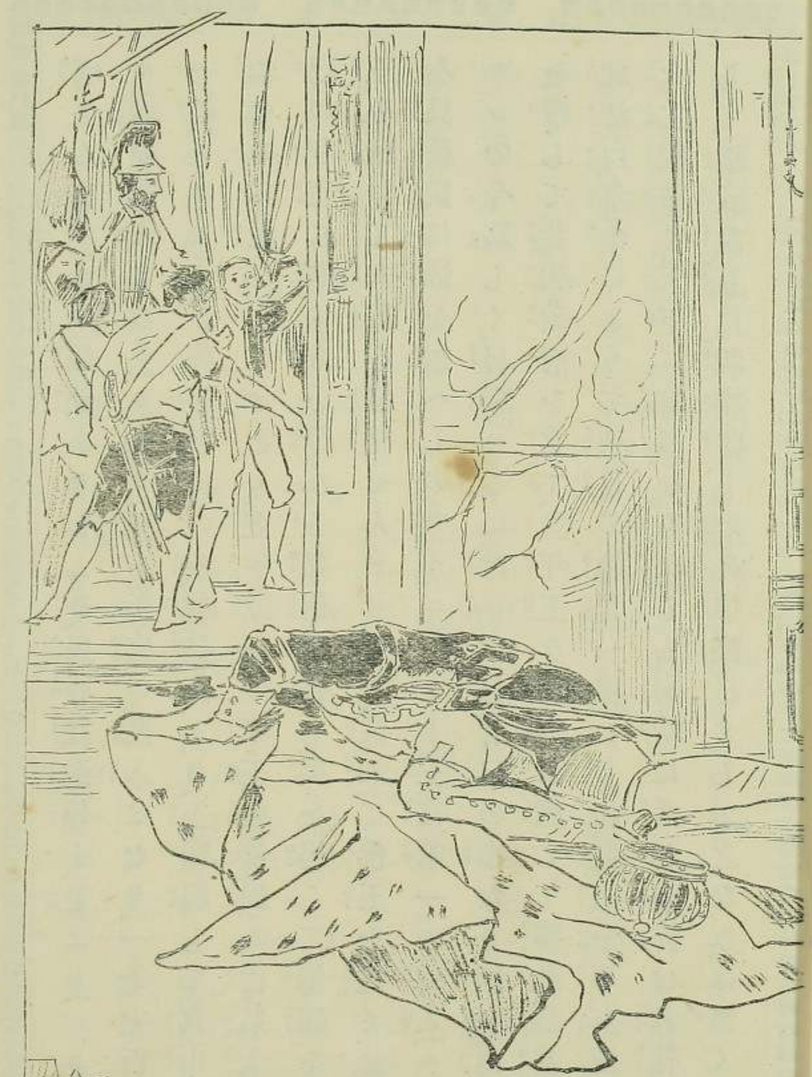


租税を負擔して、苛酷なる法度の下に呻吟し、困窮臥死に瀕するもの多く、税吏に抵抗して紛爭を生ずること頻々あり、又當時人民自主の跡全く滅して各州皆知事の横暴を逞ふするのみ、弊風益長じ政綱愈〻衰へて遂に收拾すべからざるに至れり、是に加ふるに「ヲルテイル、ルーソー」等の所論宗教を譏刺して人心の信仰を壞り民主を唱へて王權の非理を鳴らすもの蕩々一世を風靡して人心恰も醉へるが如く狂へるが如かりき、一千七百七十四年「ルイ」十五世『洪水わが後に來らん』と呼びて死し、「ルイ」十六世王位に昇れるに及びては、財政の紊亂益甚だしく、禍機一髪の間に迫まりぬ、是に於て一千七百八十九年國民議會を開き、法度の改正施政の良法を求めしが平民の勢力次第に增加し、同時に政黨の俱樂部盛りに起りて、各激烈の議を吐き、王兵力を以て議會を



チユレリー宮ニ於ケルナポレオン





嚇さんとするの擧動ありしより、民心益激昂し、是より「バスチール」城の闖入となり、「ワルサイユ」王宮の亂入となり、一千七百九十一年「ミラボー」の死後、官民の疾視益高まり、王微服して宮中を脱去せるに及びしことあり、翌年歐洲の諸王此佛民の亡狀大に自己の利害に關するを恐れ、各邦相聯合し、兵を起して佛國を攻め、王を助けて人民を鎭壓せんとせしも、只却て佛王を危くせしのみ只薪炭に油を加へしのみ、「チユレリー」王宮第一の侵入「ナポレオン」の今親しく目擊せるは、此年六月廿日の事なり、國會遂に王を廢して共和政府を立て、翌年王を死刑に處して擾亂益甚だし、此流血革命によりて積日の陋習一掃せられ、自由平等友愛の三大主義廣く天下に宣揚せられしも、同時に共和の弊は其極に達して諸政黨互に相擠陷し刑死慘戮日として之なきは無く人心



遂に共和に倦みて、强力の君主を戴かんを思ふに到れり、「ナポレオン」の現はれしは實に此の如き時世なりき、蓋世の英雄一代の風雲に乘じて撥亂反正の大手腕を振へるの狀如何は漸次章を逐ふて之を說くべし、

當時「コルシカ」に兵亂あり、嘗て同島獨立の爲め佛國に抗して後降れる「パオリ」(ナポレオン)當時此人と熟知なりき)なるもの今新たに英國と力を合はして其獨立回復を謀り、「アヤチオ」市燒けて「ボナパルト」家も家產を奪はれ、全家擧りて佛國に來り「マルセーユ」に住せり、已にして一千七百九十三年の慘血は初まれり、佛國の一半は他の一半と爭鬪し、西部南部は皆砲火なり流血なり、「リオン」市は四ヶ月の攻圍に陷り、「マルセーユ」また次で降りしが、「ツーロン」市は英兵を迎へて自ら守れり、佛政府三萬の兵を遣はし

て此を攻撃せしむ、「ナポレオン」此軍中にありて砲兵士官なりしが一将官不在にして他の将官は負傷せるを以て彼自ら砲隊司令官となれり、時に政府より監軍來りしかば「ナポレオン」其自ら任を嗣げるを述べ砲兵に關しては一切他の容喙を許さゞるべしと述ぶ二十歳の青年此大膽の言を放つに驚き、監軍問ふて曰く此責任を負へる汝は何物ぞや、答へて曰く衆人其職を知らざる間にありて我は自ら其職を知るものなり、總督に其作戰計畫を問へ余が所爲の正否直ちに知るべしと、而して總督の作戰計畫は兒戲の如し、國會其任に堪へざるを知りて之を召還し「ドゴムシール」を遣はして之に代らしむ、新將軍能く砲兵長官の能を知りて厚く之を信用せり「ナポレオン」丘上に砲臺を築きて彈丸を下すこと雨の如し、監軍其砲戰の中途に砲臺を少しく改造ぜんとす、砲臺官來て之を遏めて曰く『君は只其職を守れ、我自ら砲兵官の事を爲さむ、砲臺は此の如くして可なり、我頭を懸けて之を保証すべし』と謀略其功を奏し城遂に陷り、英軍住民を護して逃遁し、佛兵入りて之に代りぬ、総督深く「ナポレオン」の功を認め、落城の後十二日彼を將官に昇らしむ、是より歴史は「ナポレオン」を去らざるなり、



## 第二　將軍時代

「ナポレオン」「ツーロン」の圍に偉勳を奏して少將に任ぜられしも、天未だ時を借さず、些々たる事よりして、反對者の陷しゐる所となりて其職を廢められ、怏々として巴里に歸り、一時は嚢中空しく馬車を賣りて衣食を支ふるに到れり、蛟龍未だ雲雨を得ず猿

獺の笑となりて泥土に窮涸するの狀眞に憫むべし、過敏激烈の質は極端より極端に走る、軍隊を追はれて「ナポレオン」は今田舍の生を思ひ、「セイサア」たるを得ずして彼は今「シンスナツタス」たらんと欲す、是に於て先に三年間駐在せる「ワレンス」に趣き兄「ザヨセフ」に遇ひ、行て「モンテリマール」村に留り、風土の意に適せるを喜び、賣物の邸宅あるを見て之を購はんとせしが、價極めて廉なるを訝りしに其邸宅に嘗て親殺しありきと答ふ、「ナポレオン」顏を變じて直ちに購求を斷念し匆々巴里に歸り兄は行て「マルセイユ」に向へり、

天今彼を巴里に呼べり、是より先き革命の亂已に極度を通過せり、所謂「戰慄時代」は已に去れり一千八百九十五年又憲法を新たにして「ヂレクトリー政府」を作り全國士民の稱賛を受け、第十日



を以て施行の初となさんとす、然るに巴里の府民中此に鬱らさるものあり、極端の共和黨王政黨の殘類相合し、愚民を煽動して國會を襲はんとす、國會之れを聞き議員「バラー」をして兵を督して亂民を鎭定せしむ、バラー副官を求めて「ナポレオン」を得たり、時なる哉時なるかな、蛟龍已に雲雨を得たり、天才已に機會を捕へり「ワンテミエール」(佛國共和政府の用ゐし曆法の月名)十三日砲彈暴民を一掃して霹靂の如し、正に是絶世の巨人電火を握り風雲を驅つて全歐の活劇を演ずる登場の鼓樂、

革命の後は大火の後に似たり、天を焦せる猛焰既に鎭まるも餘燼は容易く滅せず、佛の內亂未だ全く平定せずして人心の危懼猶息まず、然れ共外戰は(佛國の民政を亡さんとして聯合軍起れること前に述べたり)概ね勝を得て和するもの相繼ぎ、千七百九

十五年に到りては佛に敵する者「英」「魯」「墺」の三國のみなりき、今や佛政府は大軍を募り、之を三隊に分ち、一は東北日耳曼に向はしめ、二は「ライン」を渡りて墺都に向はしめ、三は伊太利に赴きて墺兵及「サルヂニヤ」の兵を擊たしめんとす、而して伊太利軍の總督は「ナポレオン」なり、「ナポレオン」時に年二十六、發程に先ちて故共和政府の將軍「ボーアルチー」の寡婦「ヂョセフィン」を娶り、一千七百九十六年三月廿一日巴里を發して伊太利に向ふ、發するに臨み兵を勵まして曰く、嗚呼諸兵よ汝は餓て衣無し、共和國は汝に負ふ所大なり、然れ共汝に給する能はず、今我來て殷富豊沃の國土に汝を導かんとす、前途の好望斯の如し、汝豈に勇に乏しきを得んやと、一千九百年以前「ハンニバル」が「カルセージ」兵を勵ませる言亦此の如かりき、前後二大英雄の間共に之と比すべきも





の世に出でしは只一人羅馬の「セーザア」即是也、

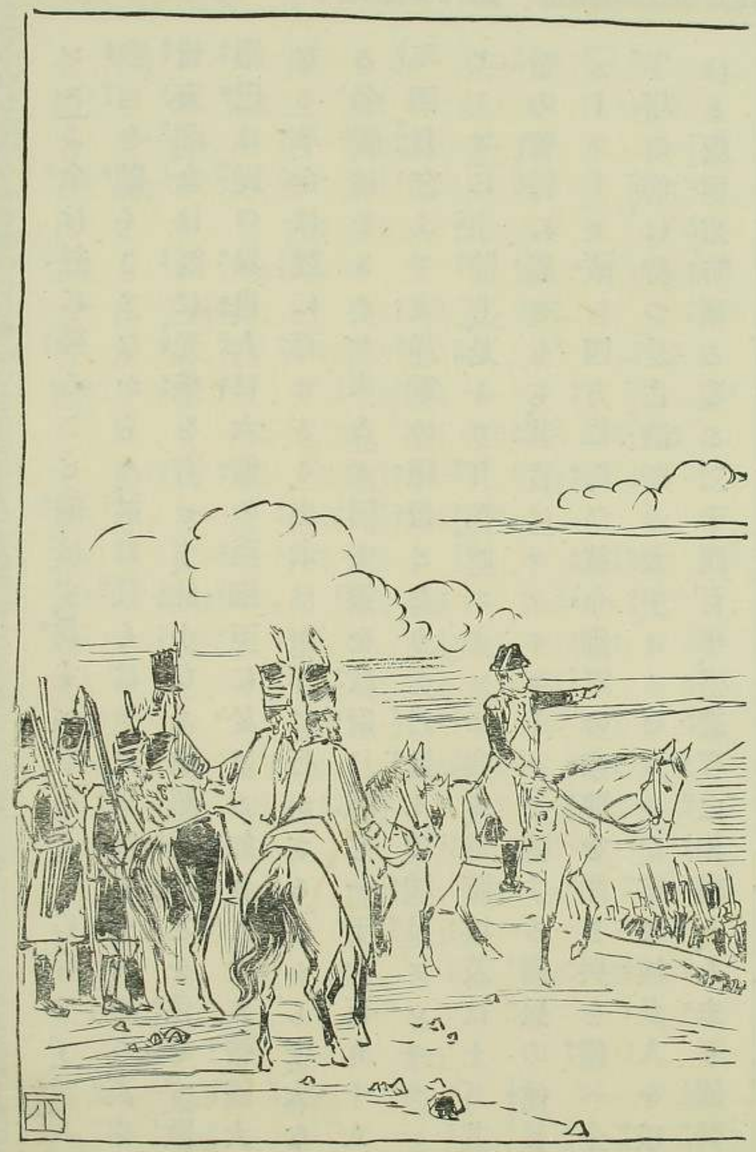
「ナポレオン」の伊太利軍は二年以前より「ゼノア」の近傍に防禦の地位を取れる衰殘の兵なりき、敵は墺國及「ピイドモンド」の聯合精兵二十萬人、尋常一般の戰略を以てせば勝敗の決已に明かなり、是に於て「ナポレオン」は神敏恰も電の如く、小軍隊の全力を一點に集注して、敵の未だ備へざるに乘じ、其中心を電擊して首尾相救ふの暇なからしめ、中心破り了らば轉じて順次左右に移り此の如くして一々敵陣を粉齏し去らんと欲せり、此の如き神敏の擧動に當りて天幕輜重は贅物のみ糧食を得るは敵を破りて之より得るの一あるのみ、一切の障害を排し一切の犧牲に供して軍隊は只偏に勝たざるべからず、「ナポレオン」は勝利を信ぜり、佛蘭士兵士の性質を信ぜり、自個天才の勢力を信ぜり、嵐は吹け

り兵は起てり砲は口を開けり劍は鞘を脱せり、迅雷風動の飛將軍四萬の弱兵を以て二十萬の大軍に當り「モンテノット」「ミレシモ」「デーゴー」「井コム」及「モンドピユ」に於て十一日間五回大に敵を敗り、「サルヂニア」王をして怖れて地を割き城を開きて和を乞はしめ、直ちに墺兵を追ふて南進し、從來の成功に因て未來の勝利を察し、監督廳に書を致して曰く、明日余は墺將「ボーリユー」を襲はん彼を追ふて「ポー」河を渡り、悉く「ロンバーデー」を略取して一ケ月にして「チロル」の山上に立ち、「ライン」軍に合して「バワリア」に向はん」と、此の如くして「ローヂ」橋上の奮進あり、墺兵大に敗れ、奔て「マンチユア」を守り、伊太利の諸侯國皆和を軍門に請ふ、「マンチユーア」は墺兵の根據なり、「ナポレオン」「ミラン」より進みて之を攻むれども堅くして拔けず、而して墺政府頻りに援兵を遣はし、前

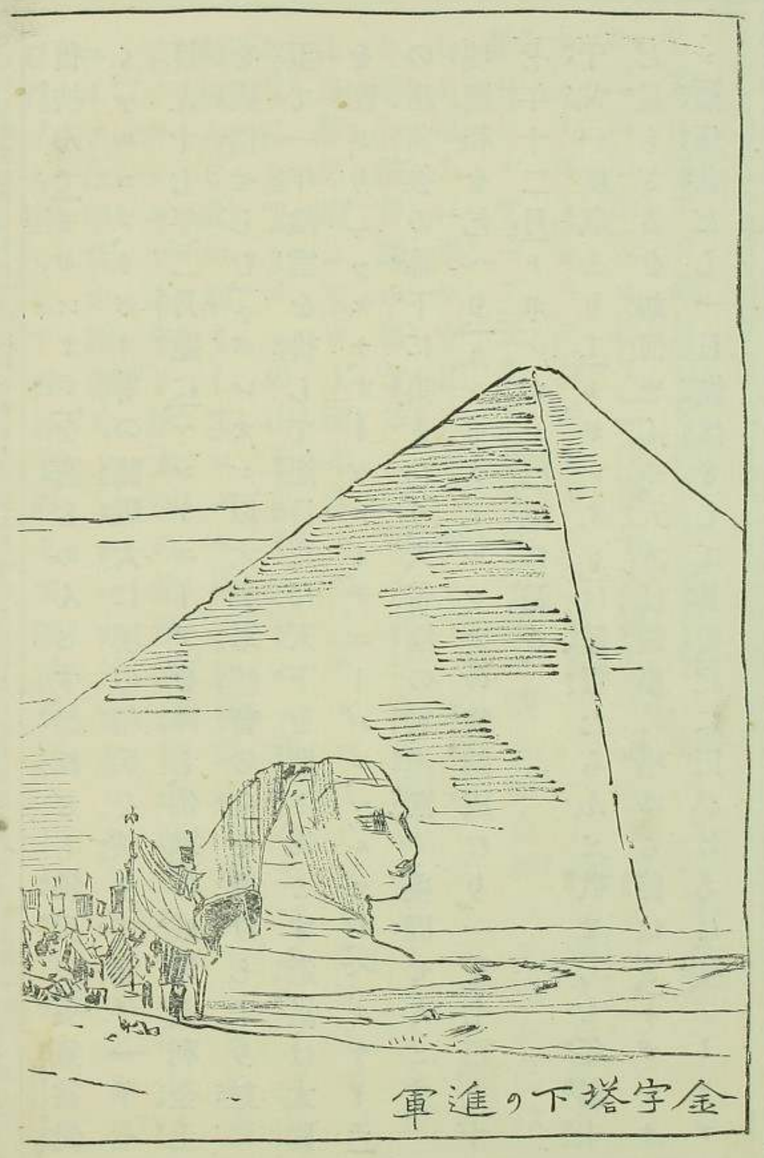


後挾んで「ナポレオン」を窘しめんとす、然れども佛兵の英氣益鋭く、「アルコラ、リボリ」等の諸戰大に墺の精兵を破りて、翌年(一千七百九十七年)二月遂に「マンチユーア」を降し、佛軍の威以太利全土を震慴せしむ、「ナポレオン」以太利軍總督の命を受けしより玆に至て一年陰雲を排して旭日正に天下を照さんとす、遊星は太陽を圍めり、「マッセナ、オーゼロー、ヂユーパル、マルモン、ベルチーエ」の諸將、彼の幕下に集まれり、大帝國の霄漢漸く凝固せんとす、墺國和を乞へり、「カムポフオルシオ」の條約成れり、一千七百九十七年十二月「ナポレオン」巴里に歸る、

于戈一度收まりて「ナポレオン」は監督たらんと欲せしも年齡未だ足らざるを如何せんや、天才は無事に堪ゆる能はず、「ナポレオン」煩惱甚だし一日慨然として其書記に曰ひけるは、吁「ブーリア







金字塔下の進軍

ンヌ」よ余は茲に殘ること能はず、爲すべき事こゝに存せず、衆人我言を聽くことなからん、茲に殘らば余は只沈下せんのみ、萬事皆衰頽、余は既に光榮を有せず、此小なる歐羅巴は之を供せず、歐羅巴は馳の巣也、人口六億の亞細亞に於ける如き大なる帝國大なる革命は茲に存せざる也、余は東洋に行かざるべからず、大なる名譽はこゝより來る」と因て策を政府に献じ一千七百九十八年四月乞ふて東洋軍の總督となり、七月進んで埃及「アレキサンドリア」に上陸し、是より其都城「カイロ」に向ふ、當時埃及は土耳其帝の管轄に屬せしも、其實は「マメリユーク」と號する騎兵の酋長「ムーラード」威を四方に振ひ彼今佛軍の來襲を聞き、兵を備へ金字塔の傍に待つ、是古波斯の大王「カムビセス」が嘗て埃及人を破れる處爾來時移ること二千四百年、盛衰存亡相續き、人去り國替



るも「ナイル」の流れ舊に依て綠りなり、懸軍萬里遠く此異域に來て金字塔の高く天に聳ゆるを見るもの胸懷自ら爽豁たらざるを得んや、「ナポレオン」陣頭に馬を驅り凜然大呼して曰く嗚呼兵士よ四千年の齡夫の塔上より汝を看下す、汝何人ぞ奮はざる、兵氣是に於て遽に十倍し、直ちに馳せて敵軍に向ふ、「マメリユーク」の騎兵六千人、烟塵空を掩ひ、旌旗天に滿ち、軍容極めて壯なるも奮戰數刻の後佛兵の砲丸劍戟の爲めに全く敗れ、「ムーラード」は三百の殘兵を率ゐて、上埃及に退く、佛兵進んで「カイロ」を略せり、然れども此時佛の海軍は「アブーキル」の港に於て英將「チルソン」の粉碎する所となり、爲めに本國との交通遮斷せられて佛軍恰も流謫せられたるに似たり、「ナポレオン」屈せず進んで「シリヤ」を擊ち、更に其威に乘じて土耳其の主都「コンスタンチノープル」

を襲はんとし、行て「シリヤ」の「アークル」城を攻む、守るは英國著名の海將「シドニイ、スミツス」なり、佛軍力を窮めて之を攻むるも堅くして拔けず、落日遠く黄沙を照して城將の面縛また望む可らず、「ナポレオン」大に志を挫き、東洋遠征の大夢遂に破れ、五月兵を收めて埃及に歸り、更に土耳其の來兵を破りしが、本國の形勢殆んど危殆なるを聞き、志を決して潛かに船に乘じ英人の偵察を免がれて十月初旬佛國に歸れり、

是より先き「ナポレオン」の不在に乘じて、墺國は和約を破り、露國と同盟して悉く伊太利を回復し、別軍は又「ライン」を渡り瑞西に臨みて佛に攻め入らんとす、況んや國内には反對黨再ひ亂を企つるあり、財政頗る難く政令行はれず、百事墜綱して反民の怨言益〻高く、監督政府の運命將に旦夕に迫らんとす、是を以て「ナポレ



オン」の歸るや國民喝采して之を歡迎せり、馬上の英雄今や干戈を棄てゝ無事に懊惱するの時に非ず、乃ち當時の政權を執るものと軍人とに結托して之を黨與となし、又上院の心を結びて一千七百九十九年十一月遂に從來の監督を廢せしむ、然れども五百員議會は頑として之に反し、「ナポレオン」を以て自由の公敵となし主權を簒奪せんとするの大逆者となし、法に依て之を刑せんとせる際、「ナポレオン」は將官をして一隊の兵を率ゐて議會に闖入し銃鎗を振て抗拒するものを脅制せしむ、議員恐れて逃亡し殘余皆「ナポレオン」の黨となり、會議して從來の憲法を廢し、新たに三人の執政官を置き、任期を十年として、行政司法の權を掌握せしむ、中一人は實權を有せるもの、他は副官にして之を補翼するに過ぎず、又議院の制を改め先づ一邑一郡の人民をして其

中の名望者を擧げしめ、其數邑の名望者の十分一を撰で一州の名望者とし、又各州の名望者を撰び全國の名望者とて此の中よりして國會の代議士を撰ばしむ、是を以て衆人は直接に撰擧に關するを得ず、故に此新憲法は名は共和政治なるも其實は政權全く執政官に屬したるもの、佛蘭西大革命はこゝに至て全く局を結べりと云ふべし、

此新憲法に因りて「ナポレオン」は第一執政官となり、悉く國内の政權を掌握せり、内或は不滿を抱く者無きに非るも「ナポレオン」の名聲赫々として天下に轟き大勢已に全く定まるを見て敢て抗議せず人民は參政の權を削滅せられしも從來騷亂絶へずして高枕平臥の日少なかりしを想ひ、甘んじて英雄「ナポレオン」の新政に服せり、





## 第三　執政官ナポレオン

一千七百九十九年「ナポレオン」佛國の第一政務官となり、首として歐洲諸國と和を講ぜんとし手書を裁して英國王「ヂオルヂ」三世に送りて曰く、

「國民の意に隨ひ共和國の首長となりて余は先づ親しく英國々主陛下に我志を告ぐるを便とす、天下兵亂に苦しむこと已に八年戰爭は永遠ならざるを得ざるか、戰爭を根絶するの道遂に存せざるか、歐羅巴の二大國は戰勝の虚榮の爲め國民の商業平和幸福を犧牲に供せざる可らずか。平和は首先の必要なり、首先の光榮なり、吾人は爾かく之を感ぜざる可らざるか、此の如き感情は自由の國民を治めて專ら之が幸福を企圖せ

る陛下の胸裏に存せずんばあらず、儀式典例を省きて截然直白せる之の書中に陛下の見る所只余が一般平和の望のみ、英佛兩國は其力を濫用して平和の來るを延滯せしむるを得べし、而して得るところは人民一般の禍害に過ぎざらん、然れども余は文明國民の軍は天下兵亂の終滅に繫はるを斷言す、「ボナパルト」

英王答へず大宰相「ピット」之に代はりて、佛國若し舊王統を再立せずんば講和するを欲せずと答ふ「ナポレオン」英に拒まれて魯國と和せんとす、魯帝之に傾き兵を還して又同盟軍に加はらざるべきを宣す、

是時に當りて墺國の老將「メラス」は十四萬の兵を率ゐて「ビードモント」に入り春を待て「ゼノア」を封港せる英の海軍と連絡し、進、



んで「ゼノア」を經佛境に入らんと欲せり「ナポレオン」偵して之を知り、大軍を募集して之を二軍に分ち、一を「モロー」に附して獨乙の内地を犯さしめ、自ら其一を率ゐて以太利に入らんとし一千八百年一月初旬令を發して「デヂョン」等後備軍を編成し、新聞に『第一執政官は茲に兵士を閲せん』と掲げしむ、墺英の間者行て之を見れば兵精しからず兵器服裝極めて粗なり豈に圖らんや「ナポレオン」は秘密に眞個の後備軍を徵集して計畫已に定まれるを、三月十七日「ナポレオン」偶々其書記に向ひ欣然として問ふて曰く『汝わが「メラス」を敗らんとするの地を知るや』書記驚き答へて曰く『知らず』『可し以太利の地圖を開け余汝に示さん』と、因て針頭に赤黑を點じたるものを取り、敵軍の位地に黑を植へ佛軍のに赤を植ゑて戰略を示して曰く、『「メラス」は本營を「アレキサン

ドリア」に設く、「ゼノア」降らざれば彼こゝを去らざるべし、「セイントベルナード」を指して余は「アルプス」山を此點に越し、彼余の以太利にあるを偵知する前、其背後に出でゝ墺國との交通を絶ち、「スクリピヤ」の平原に彼を追はん、(サンザリアノウ)に赤針をたてゝ」而して余はこゝに彼を敗らん」と是夫の著名なる、「マレンゴウ」の作戰計畫なりき千八百年五月六日「パリ」を發し「ゼチワ」に着し、まづ工兵を遣はして山路を檢せしむ、復命して曰く『山路極めて險、兵軍の通過極めて難し』曰く『到底通過すべからざるか』『否極難を辭せずんば能はざるにあらず』「ナポレオン」蹶起して曰く『然らば進め』と是に於て兵馬輜重極めて嚴重に調査せられ、破靴損衣は直ちに修理せられ、六萬の兵馬續々として「アルプス」の深山濃霧深き所を進めり、高嶺五月の積雪崩れ來て一隊兵馬全く深



谷に陷沒せるもありき、難を凌ぎ險を越え、四日を經て以太利の平原に着し、六月二十日「ミラン」府に入り「ミユラー」を「プラヂエンチヤ」に「ラーン」を「モンテベ」に送る、六月八日「ミユラー」より使來りて「ゼノア」の守兵糧盡き力屈して遂に軍に降れるを告ぐ、「ナポレオン」翌日進軍し、十四日墺軍と「マレンゴー」に會す、墺軍拂曉「ボルシダ」河上より進み來り、午前十時「ナポレオン」戰場に達せるときは佛將「ビクトル」大に敗れ、同「ラン」敵の合圍する所とならんとす、之に於て軍中の最精鋭「執政官護衛隊」を分ちて敵の紆廻を遮らしめ、「ナポレオン」自ら第七十二旅團を率ゐて進む、茫々たる大原野中執政官自ら兵を督するを見て佛軍大に勇を回復せり、彈丸雨下の間に立て「ナポレオン」呼で曰く、諸兵よ我軍已に退却に過ぎたり、今は宜しく進むべきなり、我習慣は戰場に睡ふるなるを

記せよ』「ボナパルト」萬歳『執政官萬歳』の聲四方より起りて進軍を報ずる鼓聲の中に沒し去り、全軍勇進奮鬪して半時間にして先に四時間防禦の戰場を領せり、墺將「メラス」大敗して休戰を乞ひ、「ゼノア」「チユーリン」「トルトナ」等の諸城砦を與へて「マンチユーア」以外に退却するを得たり、「ナポレオン」巴里の同僚に書を送りて曰く「マレンゴー」の翌日大將「メラス」其將官を我に送りて和を乞へり、別紙の約定整へり、其夜「メラス」及我將「ベルチーエ」之に記名せり、余は佛蘭士國の民其軍隊に滿足せんことを望む」

第一執政官は國民喝采の中に巴里に歸れり、彼先に外征の途に就きしより玆に至て只二ヶ月を經しのみ、而して此短日月間に立てたる偉功實に驚嘆に堪へざるなり、國民の喜悦甚だしきも怪むに足らず、六月十四日佛軍「マレンゴー」に一度退却せる時、一





旅客のこゝを過ぎしもの「パリ」に來て佛國の敗を傳へしかば人民皆之を信じたりき、故に豫期外の大勝利に歡呼するは素より當然なりしなり、

「ベルチーエ」と「メラス」との記名せし約定は一度戰爭を休まし、が議九月五日に破れ其年十二月「モロー」の佛軍「ホーヘンリンデン」の積雪を踏で、大に墺兵を敗り、長驅して國都に迫りしかば、墺國遂に力屈して和を乞ひ「ライン」左岸の地悉く之を佛に讓り、又以太利の領地を減少して漸く局を結べり、

英國の大宰相「ピット」『マレンゴー」の戰記を讀み、大陸の戰望なきを視慨然大息して曰く、歐洲の地圖を卷け、二十年間是圖無用ならんと、其年三月「アシイン」の條約ありて英佛二國亦和を結び、歐洲の天地初めて大平和の光を仰ぐに至れり』、「ナポレオン」列國

と平和を結びてより、專ら内地に力を盡し、政府の權を固くして文化の德澤を普く庶民に及さんとし、先づ首として過激の共和黨と頑陋の王政黨(先朝「ブルボーン」家を回復せんとするもの)を一掃せんと欲せしが、一日偶劇場に赴く時、王政党が地下に埋めし爆烈彈「ナポレヲン」の馬車を去ること十歩内に轟然破烈して陰謀發露せしかば、之を機會として反對者を伺察し、囚禁し、流謫して、全く其禍根を絶てり、

「ナポレオン」が當時の勤勉と技倆とは彼に親近せるものを驚絶せしめたり、革命の際、外國に移住せるものゝ歸國法を立て、加特立教を再興して宗教議式を回復し、又教育事業に意を注ぎて、大に公立諸學校を設立し運輸の便を計りて水陸の路を通じ、土木を起して各都市を壯麗にせる等内治の改良枚擧するに遑あら





ず特に從來條緒錯雜して一定の法典なく人民の困惑多きを慮り、斯道の碩學老練の有司を集めて、法典編纂の擧に從事せしめ、餘暇あれば「ナポレオン」自ら其會に臨み、利害得失を辯論し、微を究め精に入りて、專門學者を瞠若せしむ、天賦の大才眞に驚嘆に堪へずと謂ふべし、是の如くして有名なる「ナポレオン法典」殆んど二千三百條、近世最上の法典完成せり、今日文明國の法典は皆之を根據とせるものなり、只此一事を以てするも「ナポレオン」の大名は千載に亘て永く不朽たるべき也、

「ナポレオン」第一執政官となりて、權君主に等しと雖も十年にし期滿つるを患ひ永く其任を繼がんとして、全國の投票により遂に終身の執政官となり又自ら其襲任者を撰むの權を得て全く歐洲諸州邦の君主と權を等うするに至れり、

先に「アシイン」の條約に因りて英佛和議を結べりと雖も、兩雄は長く兩立する能はず、彼此些細の事よりして互に條約を破りて又干戈に相見んとし、千八百三年の末より翌千八百四年の末に至る迄、兩國盛に兵備を整へ、將に一大戰爭を起さんとするの勢を示せり、然れども曠日彌久空しく相持するのみ、翌千八百五年に至りて英相「ピット」更に諸邦を連合して佛に當り終に又歐洲の大亂を起す、

「ナポレオン」職に就てより既に五年、國民皆之に悅服するも猶王政黨、極端共和黨の殘塊依然として其隱謀を改めず、將軍「モロー」も亦近頃共和黨中に加はり王黨と合して「ナポレオン」を斃さんとせしが現はれて其黨與と共に捕はれ、遠く外國に放流せらる、「ナポレオン」が先王「ブールボン」家の枝葉「エンゼン」侯を捕へ、佛國





に敵し兵を擧げんとするの罪あるとして之を銃殺せしも亦此際にあり、

是に於てか議員中「ナポレオン」皇位に就かずんば國家の安寧を望むべからずと唱ふるものあり、之を全國の投票に問へば可とするもの五百萬、而して此と共に文學の名に於て永遠の共和「セイザア」を有せず、「ナポレオン」を認めざるを論ぜるもの三人ありき、「ルマイシーエ」「ドユーシ」及「シャトーブリアン」是也、

## 第四　皇帝ナポレオン

「ナポレオン」議員國民軍隊の輿望に副て帝位に昇り是より鋭意帝國を建設するに力む、舊封建の貴族は已に滅せり、「ナポレオン」は今新貴族を造る舊勳爵階級は已に地に落ちたり、「ナポレオン」

今「レヂオンドンフール」(名譽員)新品級を起す舊來至高の武官は大將なりき、「ナポレオン」今元帥を作る、元帥の任命者左の如し、皆是れ「ナポレオン」に隨ひて硝煙彈雨の間に所謂砲火の洗禮を受けたるもの門閥私寵は毫も此光榮に關する所なし、彼等の父は「勇」なり、彼等の母は「勝利」也、

「ベルチーエ」　「ミユーラー」
「モンセイ」　「ゞユールルダン」
「マッセナ」　「アウゼロー」
「ベルナドット」　「スウル」
「ブルーン」　「ラーン」
「モルチーエ」　「子イ」
「ダブー」　「ケラルマン」

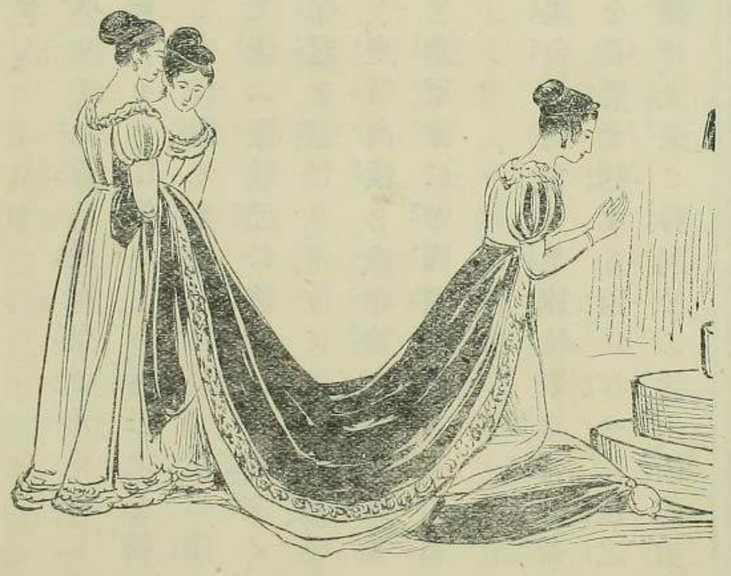


「ルフエーブル」　「ベリギアン」
「セルリエー」　「ベルトラン」

一千八百四年十二月二日皇帝戴冠式を「ノートルダム」の大寺院に擧ぐ法王「ピオ」七世特に羅馬より來て新王の頭に冠せんとす、「ナポレオン」「ジヨセフイン」と八頭の駿馬を驅る車に乘り、親兵に護衛せられて寺院に入る諸高僧之を神机の下に嚮き、法王近きて皇帝の頭と兩手とに聖油を注ぎ、高く聲を擧げて祈て曰く、

あゝ全能の神嘗て「ハゼイル」を「シリヤ」の王たらしめ、「ゼヒフー」を「イスラエル」の王たらしめ、又た預言者「イリヤ」の口を藉り之に聖意を示し。また預言者「サミユル」に因て「ソール」と「ダビット」との頭上に帝王の聖油を灑げるもの、願くは今我手に因て爾の僕「ナポレオン」の上に爾の恩寵を灑げ、我不敏を顧みず爾に

戴冠式



代りて彼を皇帝に宣せん、

法王即褥上より帝冠を取りて皇帝に授け、皇帝先づ自ら之を頭上に戴き次で之を「ジョセフィン」に戴かしめ、遂に之を褥上に返置すれば法王肅々として坐に返る皇帝之に於て更に諸高僧の捧ぜる聖書に手を加へて盟ふ盟辭已に終れば、待從高く呼で曰く『光榮至上なる佛國皇帝冠を戴けり、帝位に就けり、皇帝萬歳』と全寺院皆一齊に呼で曰く『皇帝萬歳』と歡呼恰も雷の如かりき、

翌日「シャンドマー」に於て諸軍隊に帝國鷲章旗の下附あり、皇帝自ら勅して曰く、

諸兵士よ、此鷲は汝が集合の的なり、是旗汝の皇帝其帝冠と人民との保護の爲め之を必要と判する所に存せん、汝之を保護せんが爲め汝の命を捧げ、光榮と勝利との途上、汝の勇氣に因て之を保全せん事を盟へ。

兵士一齊に答へて曰く『臣等皆之を盟ふ』

一の帝冠は十分ならざりき「ナポレオン」の保護の下なる伊太利の國人は其委員を遣はして伊太利國を佛蘭士帝土に合せんと乞はしむ、一千八百五年五月廿六日「ナポレオン『ミラン』に入り「ロンバアデー」の鉄冠嘗て「シャーレマン」大帝の戴けるものを受けて曰く『上帝之を余に賜ふ之に觸れんとするものは禍なる哉』是時に當りて英國は墺露(露の先帝弑せられて「アレキサンドリア」帝位を繼げり)と聯合して佛國と戰端を開けり、

從來佛國の最強敵は英國なりき「ナポレオン」奇計を海軍の將「ウィルニューブ」に授け陽に軍艦を率ゐて西印度海に赴き、英艦の尾擊を誘致して遠海に到らしめ、其虚に乘じて間を伺ひ急に駛

回して一擧直ちに英の本國を襲はんとす、英將「チルソン」果して其計に陷り、英國最精の軍艦を率ゐて遠く佛艦を尾して西印度海に赴けり、然るに佛艦途にして俄に航路を回せるより「チルソン」直ちに佛人の策略を悟りて急に又其跡を逐ひしが、或は之に及ばざらんを恐れ、別に快船を派して佛人の策を英國に急報せしむ、之に於て英國政府は別に兵艦を出して西班牙の沿岸に於て「ウイルニユーブ」の歸航を邀擊して大に奮鬪す、佛艦破損を生じて港に入り、修繕を卒り、進んで又英の海岸を襲はんとせしが、前路を遮られて前むを得ず、また「ガデス港」に碇泊せり「チルソン」此時に當て既に本國に歸着し、直に大艦隊を率ゐて「ガデス」に來り、佛艦を誘出して十月廿一日「ガデス港外」「トラフアルガー」の近海に空前の大海戰を演ぜり、「チルソン」此日必勝を期し、旗艦「ヴィ





クトリア」號の檣頭高く旗を飜して『英吉利は其國人の本分を盡すを望む』と大書し、激浪掀翻砲烟空を蔽ふの間精妙の策略と絶倫の勇氣とを以て遂に大に佛艦隊を敗れり、「ナポレオン」敗報を聽き憮然大息して曰く『嗚呼余只一身同時に各地に臨むを得ず』と

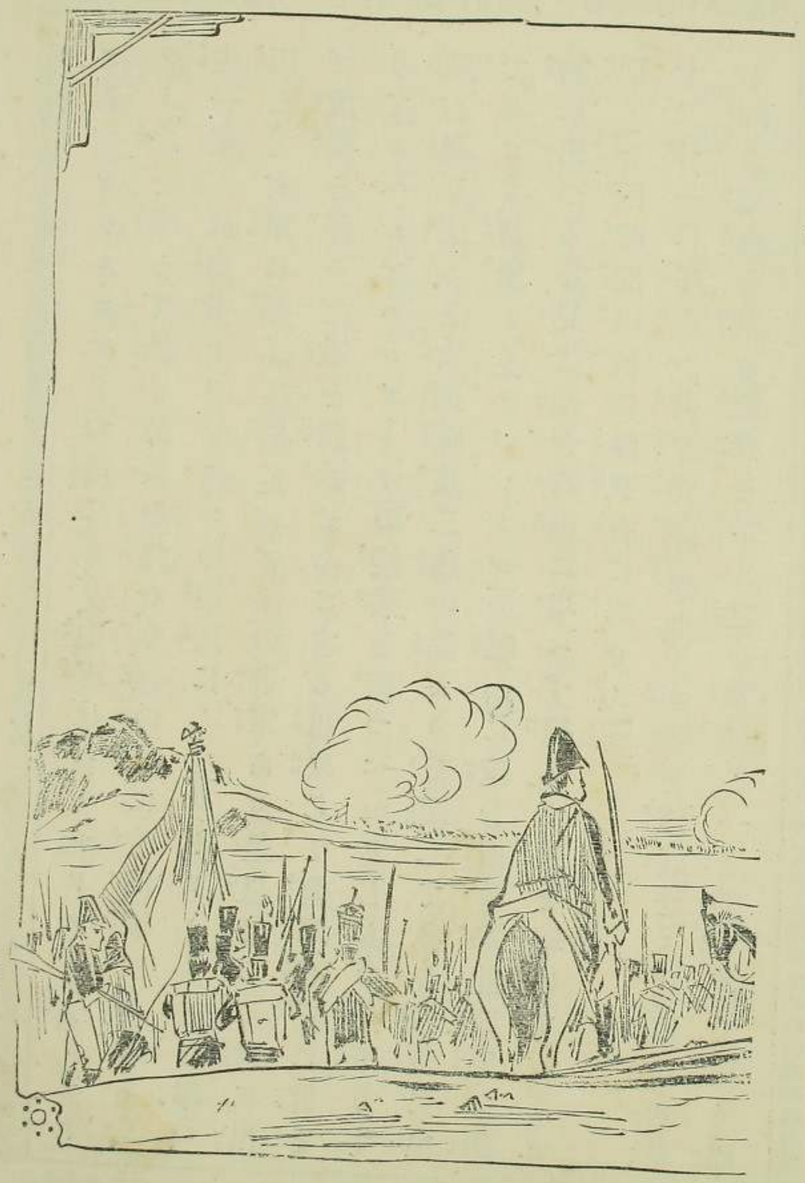
是より先「ナポレオン」八萬の兵を率ゐて、十月一日「ライン」を渡り六日「バワリヤ」に進み、十二日「ミユーニツヒ」を下し、廿日「ウルム」を略し、十一月十三日墺の國都「ウヰンナ」に入り。其廿九日伊太利軍に合し、十二月二日夫の戴冠式の紀念日に當り「オースタリツツ」の大野に立ちて廿萬の墺露同盟軍に對せり、

其方略左の如し

左翼は「ラーン」を總督として「サントン」にあり、右翼は「スウル」を將

皇帝微行全線ヲ巡視ス





として「ソケルニッツ」の傍にあり、中軍は「ベルナドット」及「ミューラー」之を率ゐて悉く騎兵を集む、全線の後に後備軍二萬人あり、内一萬人は皇帝「ナポレオン」の親兵にして「ウードノー」之を率ゐ、而して右軍に添ふて別に「ダブー」の遊軍あり、是皇帝の奇計に出で虚勢を張りて敵を誘致せんとする也、果して魯軍高丘に留まりて「ボヘシアハンガリイ」の援兵を待つべかりしもの今下りて我右翼を去ると大砲彈度二倍の點より紆回して我が右後に出でんとす、是素より「ナポレオン」の私かに望む所、魯軍此躁急の舉動に出づるを見て皇帝喜悦に堪へず覺へず聲を擧げて叫んで曰く『廿四時間内彼の隊我有に歸せん』と

十二月一日午前一時皇帝微行して全線を巡視せるに、軍隊皆是を知り、藁火を焚き歡聲を放て之を奉迎し、一老兵叫んで曰く陛下只砲火の間に來らざらんを約せ、皇帝答へて曰くわれ之を約す、爾等己れを要せん迄は我は後陣に留らん』と拂曉即令を下して曰く

『諸兵士よ魯軍は「ウルム」の墺軍失敗を報ぜんとして前面にあり、是汝等が「ホラブリユーン」に破り絶えず急追してこゝに致せる軍隊なり、吾人の位置は緊切なり、敵軍我右翼を襲はんとして自ら其側面を我に呈す、兵士よ我自ら諸隊を率ゐん、汝若し、平生の勇を鼓して敵陣を碎かば我安んじて砲火より遠ざからん、然れども一瞬時も勝利の疑はしきあらば汝の皇帝は最先陣に進みて、身を砲彈に暴さん、蓋し佛兵其名聲を賭し事國家の光譽に關するとき、勝利は躊躇を知るべからざるなり、汝等各傷者を擔はんとの口實を設けて隊を脱することなか

れ、佛人は憎める英國傭兵を敗らんこと實に要あり、汝等能く之を心に銘せよ、

此勝利はわが戰爭を終へん、而して吾人はわが冬陣に歸りて今佛國に召集中なる諸隊に合せむ、而して吾がなすところの平和は佛國民を辱しめざるべし、汝を辱しめざるべし、我を辱しめざるべし、

已にして旭日昇れり、光輝曈々例日よりも甚し、後日佛軍は歡呼を以て晴朝を迎へて勝利の前表となし「アウステリッツの太陽」なる語は軍隊の諺となるに至れり、

魯軍は「ナポレオン」の陷穽に入り、佛の右翼を打たんとして一大軍を遣はしゝが「ダブー」の遊軍不意に邀擊して之を「レーゲルン」に禦ぐ「ナポレオン」直に此機會に乘じ「スヴル」をして右翼の兵を





率ゐ突進して、魯の左軍と右軍との交通を全く遮斷せしむ、魯帝此危殆一大事を來さんを恐れ親兵を進めて「スウル」の軍を擊退せしめんとす、兩軍「プラッチェン」の高丘に合し、砲烟天を蔽ひ喊聲地を震はし、奮戰數刻にして「ナポレオン」又「ベッシイル」を將とし近衛の精兵を遣はして魯軍を擊退せしむ、佛の中軍又一齊に進擊し「ミューラア」の率ゐし騎兵隊の猛勢當る可からず、墺露の兩帝「アウスラリッツ」の高處より眺むれば中軍左軍已に敗れ、其右軍又此時に至るまでよく「ラーン」の猛擊に耐へしも、今佛軍の砲擊に全く敗れ、三軍齊く崩潰して陣後の氷湖を渡りて遁走せんとす、「ナポレオン」急驅し來り砲隊を叱して曰く『時を失ふ勿れ、直ちに湖面を砲擊せよ』砲丸始めは空しく氷上を滑りしが一人砲口を高く擧げて彈丸を直下せしめしかば氷面忽ち碎け餘皆

之に倣ひて忽ち數千人の敵兵を沈溺せしむ、墺魯の軍死者二萬人、生擒二萬人、其餘大砲四十門聯隊旗四十五旒、悉佛國の手に歸せり、聯合軍此大敗に依て全く力屈し遂に休戰を請ひ、次で和を乞ひ、大に土地を割き且巨萬の償金を出せり、此光榮の戰勝を得て皇帝大に兵士を勞して曰く『汝歸りて佛國に至らば、曰へ我「アウスリッツ」に戰へりと、國民答へて曰はん勇士こゝにありと』

「オースリッツ」大勝の佛國皇帝に於けるは「マレンゴー」の佛國執政官に於けるが如し、此に因て列邦は「ナポレオン」が佛蘭士皇帝兼伊太利王の尊稱を認め、更に「ウエニス」及「ダルマシア」を割きて佛國の版圖に歸せしむ「チープルス」王「フエルヂナンド」は佛國との平和條約を破れるが爲め其位を廢せられ「ナポレオン」の兄「ジヨゼフ」之に代はりて王となる、弟「ルイ」は「バダピア」共和邦を王國





として之に君臨し「ミューラア」は「ベルグ」の大侯國を受け、元帥「ベルチーエ」は「ノエ、シヤテル」公となり、「タレーラン」は「ベヂブトー」公となれり、是に於て佛蘭士帝國は附庸隷屬の各王國侯國及び「バワリヤ」『井ルテンブルグ』『ヘツセ』『ダルムスタット』等を聯合せる所謂「ライン」同盟を合して儼然たる一大邦と爲り、其廣袤古「ジヤーレマン」大帝の領土に等しきを致せり、是と同時に獨逸帝國は建設以來殆ど一千年にして茲に其名稱を失ひ、帝「フランシス」は獨乙皇帝の尊號を去りて單に墺地利帝と稱するに至る、時に一千八百六年八月六日「ナポレオン」年僅三十七、

是より先き英國にありては、大宰相「ピット」死して「ホックス」之に代はりしが、其平和論者なるを以て諸國皆英佛兩國の平和を望めり、然れども幾何ならずして「ホックス」亦死し兩國互に疾視し

て氷炭相容れず、魯も亦佛國の饕足の意なきを惡み、遂に英國と合し、普魯西と結び、更に瑞典「サクソニー」を聯ねて、茲に所謂第四聯合を結べり「ナポレオン」之の報に接して忽ち兵を進め、一千八百六年十月七日「シューラア」「ベルナドッド」「ダブー」の諸軍を先陣とし「アウスティド」「セリッツ」及び「ザアヽフヰールド」の諸戰を歴て、十四日「イエーナ」の大勝を得十六日「エルフルト」に一萬四千の普兵を降し、廿五日長驅して首府「ベルリン」に入れり、戰雲亂れて より纔に七日「フレデリック」大王の國は佛兵の奪ふ所となる、廿七日皇帝「ナポレオン」「ポツダム」より令を諸軍に下して曰く

諸兵よ汝等よく我期待に背かずして佛蘭西國民の信用に答へり汝等能く途に疲勞缺乏に堪へ、善く陣中に强勇と冷靜とを示せり、汝は眞に吾が王冠を保護する者也、大國民の光榮を





全うする者也、汝是精神有せん限り何人も汝に抵抗するを得ざるべし、吾人が作戰の結果を見よ、歐洲一等國中の隨一は滅絶せり、吾人の祖先が七年にして經過し得ざりし所、夫の深林「フランコニア」の諸砦「ザアレ」「エルベ」の二大川吾人は七日にして飛躍し去れり、其間四回の會戰ありき、一回の大戰爭ありき、吾人は吾戰勝の譽を求「ツダム」及び「ベルリン」に進めたり、吾人は六萬の捕虜六十五旒の旗、六百の大砲三個の城砦二十人以上の大將を得たり、而して我軍隊の半以上は遂に一發の彈丸を發せざりしを恨むに非ずや、普魯西王國の全領悉く我が手中にあり

諸兵よ魯人は將に來らんとす吾人は進んで彼に遇ふべし、半ば彼が進路の勞を省くべし、彼は普魯西の中央に他の「アウス

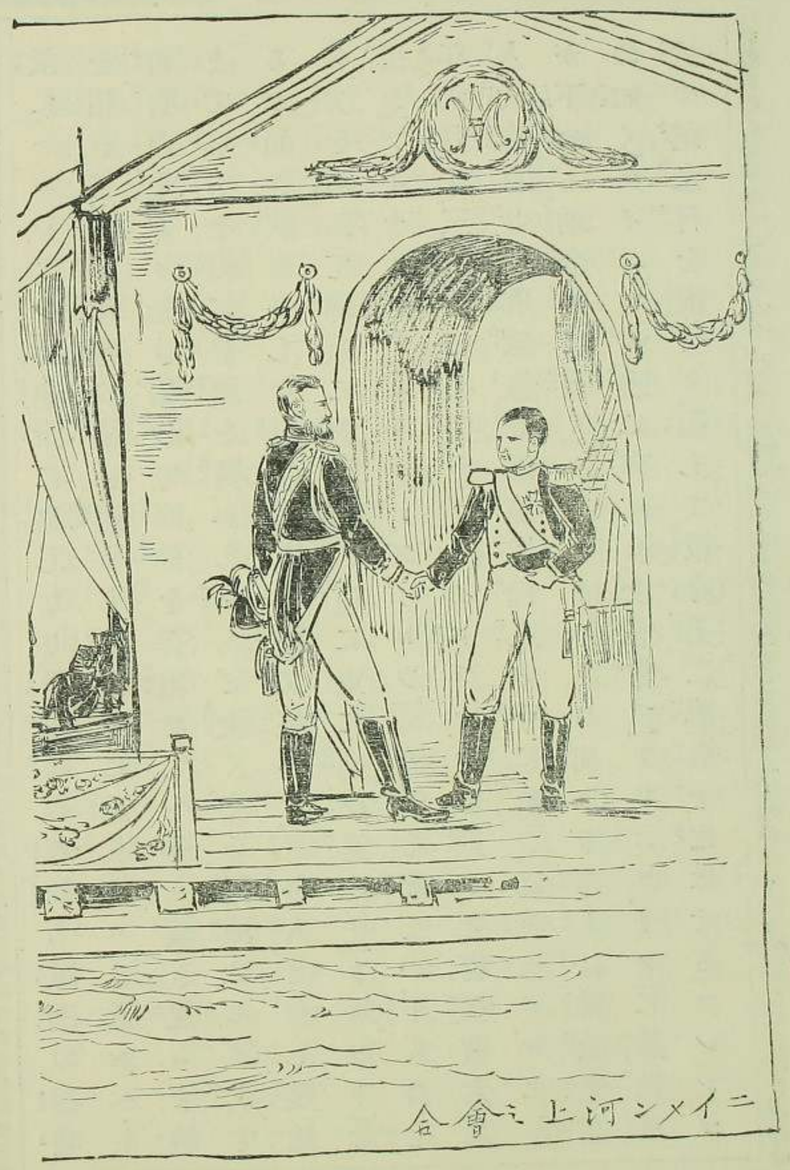
テリッッ」を見ん、前役我が平和約定の寛大を忘れたる國民は吾人に反して成効するを得ざるべき也、吾人が進んで魯軍に會すると共に、我が他の新軍隊は來てこの地を護らん我國民は普國の大臣が惶恐失神して畫せる休戰條約を憤る將來吾人は虚僞の條約に欺かれざるべし、我が永遠の仇敵たる英國人大陸の秩序を亂し海上の主權を掌握せん限り吾人は斷じて我劍戟を收むること無からん、諸兵よ『余は胸中に汝等の愛を納む』汝に對する余感情を表すは此辭に勝るものあらず」

「ナポレオン」伯林に於て大陸封港令を發し、爲に英國との通信貿易賣買は一切悉く嚴禁せられ、一切の英人大陸にある者は悉く囚人を以て目せられ、其の商品製造物諸財産は悉く沒收せらる英國海上に主權を握りて到底武力を以て抑制すべからざるが



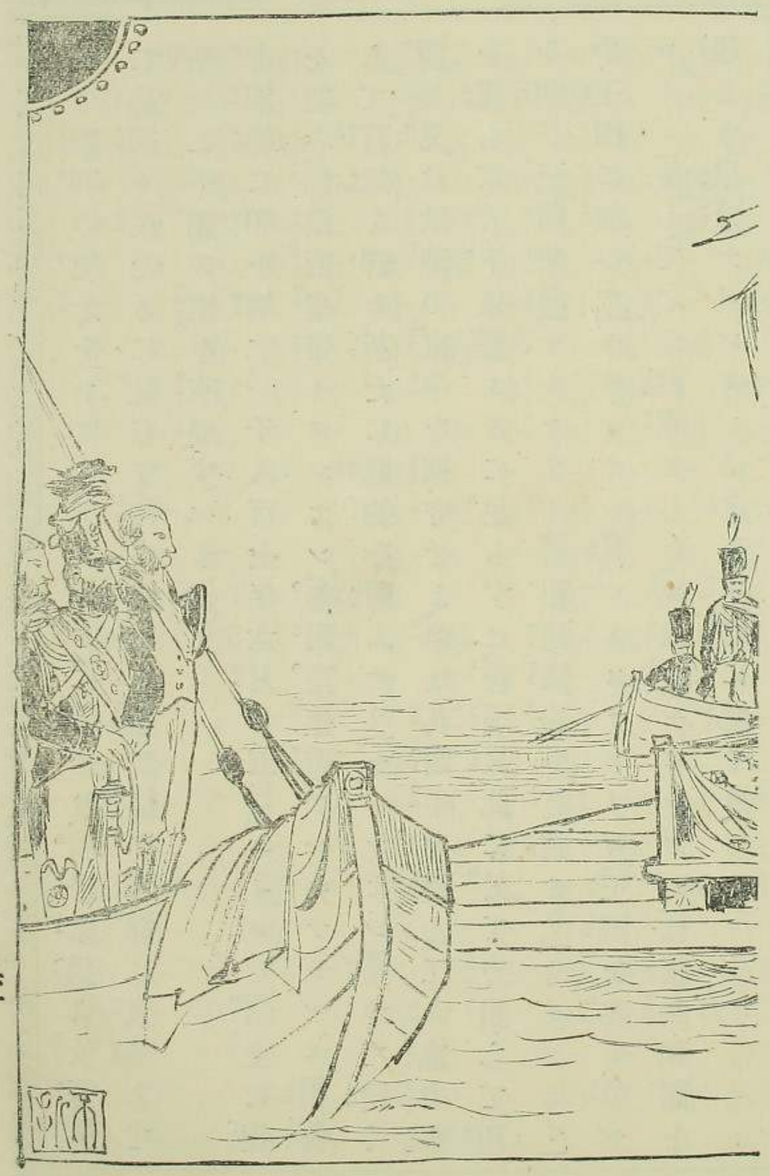


故に「ナポレオン」此窮策に出しなり、是無謀の擧忽ち歐洲の怨嗟を招きて他年傾覆の禍を速めし事惜むに餘りありと云ふべし、普魯西是より先き和睦の條件を提出せしも佛人驕き足らず飽まで威力を以て普國を脅かし、殆んど全く之を絶滅せんと欲するが如き狀ありしを以て普人憤懣に堪へず、又魯人と合し殘餘の力を震ふて佛人に當る、佛人直に東に向ひ進んで「ワルソー」を拔き「プルチユスク」「ゴリミン、アイロウ」の諸戰を歴て一千八百七年六月十三日、大に魯兵を「フリイドランド」に敗る、死傷捕獲六萬人、大砲百廿門聯隊旗廿五旒、皆佛人の手に落つ、此時「ナポレオン」が下せる勅令中に曰く『ウイスチユーラ河より吾人は神敏猛鷙の如く「ニイメニ」河邊に奔れり、汝等嘗て「アウスラリッ」に我戴冠式の紀念日を祝せり、而して汝今第二聯合を亡ぼせる」コレンゴ



ニイメン河上ニ會合





一」の勝利の紀念を「フリイドランド」に祝せり、嗚呼諸兵よ汝等眞に佛國々民たるに耻ぢす將に桂葉を纏ひ楊々國都に凱旋して新たに平和の樂を享受すべき也』と

魯國終に和を媾じ、一千八百七年六月廿五日、「ニイメン」河上に筏を組み、佛蘭西皇帝「ナポレオン」魯西亞皇帝「アレキサンドル」相會して舊怨を釋き、新たに盟約を固ふせり、「ナポレオン」語つて曰く爾後兄は歐洲の東半を據守せよ、弟は其西半を得ん、二人協力事を謀らば天下は憂ふるに足らずと、普國又此に於て力屈して和を請ひ三國使節「ナルシット」に和睦條約を訂結せり、「サクソニイ」の王國に加へて「ナポレオン」又「ウエスフアリヤ」王國を建て、弟「ゼローム」をして之に君臨せしむ、執政官「ナポレオン」は諸共和國を起しき皇帝「ナポレオン」は之を王國に變ぜり、



七月廿七日巴里に凱旋す百戰百勝の威炳燿日月の如く滿都の民之を歡迎して恰も狂するに似たり、今や佛に敵するもの、獨り英あるのみ、英其同盟軍を敗られ創夷重しと雖とも猶屈せずして佛に當らんとし、大陸の兩端瑞典と葡萄牙とに其視線を注げり、葡萄牙は大陸封港令を奉せず、「ナポレオン」之れを怒り、宣して「ブラガンザ」朝を廢し兵を進めて首府「リスボン」を占領せしむ、葡萄牙の進入は西班牙占領の先驅なりき、西班牙在來の君「チャーレス」四世、嬖臣「ゴドイ」を用ゐて、皇太子「フエルヂナンド」と隙あり、兩黨迭に佛國に救援を求めしかば、「ナポレオン」葡萄牙より兵を進め、内亂起りて市民父王の位を廢し、「ゴドイ」を貶し、太子をして即位して「フエルヂナンド」七世と稱せしむるに乘じ、直ちに佛兵を京城「マドリッド」に入らしめ、父子兩帝を廢して全王國を奪ひ、

一千八百八年第六月、兒「ジョーセフ」先に「子ープルス」の王たりしを遷して西班牙を治せしめ、更に「シューラア」を以て「子ープル」王たらしむ、然れども佛人斯くの如く勢力を增加すると共に仇敵增加して離叛爭鬪相踵で起り、羅馬法王は封港令に反して先鞭を着け佛人に其寺領を奪はれ西班牙にありては國人擧て佛人を憎み、兵を擧げて「ジョーセフ」を追攘し、葡萄牙にありては佛將「ヂユノウ」力敵せずして退却し、英將「ウエルリントン」代はりて此國を領するに至れり、是に於て「ナポレオン」親征を企て、日耳曼より歸れる八萬の精兵を率ゐて「ナバール」「ビスケイ」の境に赴き連戰連勝を得て、十二月佛兵又「マドリツド」に入る、然れども西人飽まで佛人を惡み、剽悍猛烈屈する所を知らず、其國宗を奉ぜるもの、兒童に敎ふるに問答を以てす



問　兒よ汝は何物ぞや

答　上帝の恩惠に依りて我は西班牙人也、

問　是何の謂ぞや。

答　善き、價ある民なり、

問　吾人の安寧を害するものは誰ぞ

答　佛蘭士皇帝

問　彼が性質如何、

答　人と惡魔との二性なり、

問　佛人の帝何人ありや、

答　實の皇帝は一人而して三個の身を現ず

問　其三個は何ぞ、

答　ナポレオン、シューラア、ゴドイ、

問　三者中の最悪者は誰ぞ、

答　三者悉く最悪なり、

問　「ナポレオン」を生めるものは何ぞ、

答　罪悪

問　「シユラア」は、

答　「ナポレオン」の生むところ、

問　「ゴドイ」は、

答　二者の結合なり

問　第一者の性は如何、

答　傲慢と壓制、

問　第二者のは、

答　掠奪と殘忍と、





問　第三者は、

答　強慾謀叛及無知、

問　佛人は何物ぞや、

答　先には基督教徒にして今異端となれるもの、

問　佛人を殺すは罪なりや、

答　否、人もし彼の異端の犬戎を殺さば神惠を被らん、

問　西班人もし其義務を怠らば如何、

答　之を死刑に處すべし、之を叛人と目すべし、

問　敵人より我を救はんものは何か。

答　己に賴み軍隊に賴るにあり、

同時に墺人また虛に乘して兵を擧ぐ、皇帝其報に接し電行して巴里に歸り急に將軍「ベルナイエ」「マツセナ」「ダブー」等を遣して日

耳曼に赴かしめ、千八百九年四月、親ら兵を督して巴里を發し「アベニスベルグ」「エクシユール」「ラチスボーン」に連勝し、五月十一日長�adして墺都「ウヰンナ」を陷れ、次で墺將「チヤーレス」が十萬の兵を「ダニユーブ」左岸に追擊し、七月四日流を渡りて「ワグラム」の大戰あり、墺軍大に敗れ、死者四萬人、傷者九千人、二萬の生擒、十旒の聯隊旗、四十門の大砲悉く佛人の奪ふ所となる、十月十四日、和議また成る、今や「ナポレオン」は勢威と光譽との絶頂に達せり、微々たる貧士官怏々志を得ずして將に田野の生を營まんとせしもの僅に十餘年にして全歐洲の覇王となり、領内の州一百三十人口一億二千萬列王彼が鼻息を伺ひ猛將彼が帳前に伏し、其朝廷は雄麗を極め其威武は四境に徹して八種の國語齊しく「佛帝萬歳」を唱ふるに至れり



「ナポレオン」既に權威光榮の極を窮め、帝朝の基を固うし、列邦の交誼を厚うして、鋭意歐洲の平和を保たんとす、皇后「ジヨセヒン」貞操にして容姿あるも子なし「ナポレオン」彼女を愛すること素より切なるも、炎々たる胸衷の功名心は、愛情を犠牲に供せずんば止まず、千八百九年十二月遂に「チユーレリイ」宮に離婚式を擧げ「ジヨセヒン」は畢生皇后の尊號を稱し、歳俸二百萬フランを受くべき恩命を得て「マルメイゾン」の閑居に退けり、墺皇女「マリイルイサ」新たに佛蘭士皇后となれり、後十一ヶ月にして百一發の祝砲は帝國嗣君の誕生を報ぜり、

「ニイメン」河筏上の約は今將に敗れんとす、初め「ナポレオン」墺地利をして波蘭諸州を割かしめしこと、魯は之の利益を分受せんと期せしに能はず、魯亦封港令を嚴守せずして、密商に因り英國

と交通せしが、佛人之を知りてより兩者交相惡み、迭に兵備を整へ糧食を集めて、干戈の間に相見んとするに至れり、是に於て訂盟條約に因り、普國は二萬人、墺國は三萬人、伊太利は二萬人「ライン」同盟は八萬人、皆來て佛軍に應ぜり、一千八百十二年五月九日「ナポレオン」巴里を發し「ドレスデン」に諸侯王を集め、六月波蘭に着し「ヰルコウスキイ」の本營より令を諸軍に下して曰く、

諸兵よ、魯國は先に佛國と永遠の同盟を約して、今日其誓を敗れり、而して佛人の驚章旗「ライン」を渡るに非ずんは、魯人は其行爲の說明を與へざるべし、魯人は佛人を衰へりとなすか、吾人は已に「アウステリッツ」の兵士に非るか魯國は吾人を侮辱と戰爭との間に置く吾人は是二者の撰擇に躊躇すべからず、汝等宜しく進軍せよ「ニイメン」を渡りて兵を魯領內に進めよ、





是佛國軍隊の光榮なるべし、而して他日吾人が結ばん平和條約は五十年間魯人が歐洲に及ぼせる禍害を攘ふべし、

五十萬の兵は是軍令を讀めり、是「ナポレオン」が率ゐし最多最强最美の軍にして別れて十五隊となる之を督するものは皆諸王侯也、

「ニイメン」河を渡るに三日を費やせり「ナポレオン」左岸に至り須臾留りて沈思し、遂に之を渡りて曰く、運命は魯人を促せり、天の命ずる所我之を爲さんと即ち巨人の歩を以て進み、二日急行の後俄に魯人を襲ふて之を敗る、魯帝之の報に接し書を佛軍に送り若し軍を「ニイメン」に退けば和を議さんと述ぶ「ナポレオン」答へず次日進んで「ヰルナ」に入る、

「ヰルナ」に留ること廿日、假政府を立てゝ周圍を統治せしめ、議會を

「ワルソー」に開て波蘭の回復を議せしめ、又進んで魯兵を追ふ、追行の第二日に於て、佛人は魯人の奇異なる防禦法に一驚を喫せり魯人は力を盡し兵を集むるも、敵の大軍に當る可らざるを悟り、勉めて其鋭鋒を避け、悉く收穫家畜民舍を徹し、野を清めて糧食の掠むべきもの無からしめ、坐して佛人の疲弊に乘ぜんとす、五十萬の大軍は只茫々たる荒野を進めり、斯くして、七月末日「井テプスク」に着す「ナポレオン」此不意の戰爭に遇ふて瞠若たるのみ即一將を召して曰く、余茲に留り。茲に軍隊を休養せむ、一千八百十二年の戰は既に了れり、一千八百十三年の戰は殘餘を完ふすべし汝注意を怠る勿れ、吾人は「チャーレス」十二世の愚を學ぶ可らずと、嗣で「シューラー」を召して曰く、我が旌旗をこゝに植よ、一千八百十三年に吾人は「モスコー」府を見、一千八百十四年に「セ



ントペーダースブルク」を見ん、魯國戰爭は三年を要すべしと、是實に彼が決心なりき、然れども魯帝は却て之の猶豫に驚き、新たに意を決して先に幻の如く遁逃し去れる兵士を擧げて來り向はしむ劒光一たび閃めきて「ナポレオン」何をか躊躇せん。驀然兵を督して之に向ひ、八月十四日敵軍を「クラスノフ」に敗り、十八日之を「スモレンスク」より追ひ、卅日又之を「井アツマ」に敗る、魯領一たび侵入せられて大戰の徵候已に歴然、

此時に當りて魯の將軍「トルリイ」其職を罷められ、著名の宿將「クツソフ」代りて十三萬の大軍を統べ京城「モスコウ」府に通ずる途上に於て「ボロヂノ」と「モスクワ」との間に據り、「ナポレオン」の來襲を待つ、今や佛帝、魯帝が精を盡して勝敗を一擧に決せんとするを知り、九月五日陣を進めて魯の大軍に面す、魯兵は丘上に據り、

右に森を帶び、左に村を扣へ、前面には谿谷細流を有し、諸處に砦を築き、中央に巨大の砲塞を築きて、防禦頗る嚴なり、佛軍の今之に當るもの又十二三萬、兩軍の大砲各五百門、七日昧爽皇帝令を下して曰く、

諸兵よ汝等の熱望せる戰將に始らんとす、此後勝利は汝等の雙肩に懸る勝利必ず得ざる可らず、勝利は富を來さん、而も吾人は靜かに冬陣に休まで、故國に歸らむ、汝等「アウステリツ」の兵たれ、「フリードランド」の兵たれ、「井テプスク」「スモレンスク」の兵たれ、而して後世子孫は當に吾人を說くべし、「彼は「モスコー」城壁の下夫の大戰中にありき」と、

魯軍には高僧粲爛たる盛裝を凝らして陣前に現はれ聖像を諸兵に示し說くに國家に盡して天上の應報を受くべきを以てし、



兵士は皆聲を擧げて盟へり、佛軍曉霧を侵し、進んで敵の三面を襲ひ、猛擊して其堡塞を陷る、魯人一度退きて忽ち又進み來り亂戰奮鬪、數刻にして勝負未だ決せず、此後魯人の剛勇は百戰百勝の佛人を驚かしめたり、魯軍の一團三萬人よりなるもの、生殘僅かに八千人、佛人未だ嘗てかゝる血戰を戰ひしことあらざりき、佛の諸將「ナポレオン」に說て曰く、願くば陛下親兵を遣はして更に一大奮討を試みよ、「ナポレオン」可かずして答へて曰く、吾が親兵若し一度敗れなば如何して後戰を能くせんと、之に反して魯は全軍の精を盡して敵に當る、翌朝魯將軍聯隊士官の報告に依り、漸次退軍して「モヂヤイク」に退く而して佛軍は新たに「スモレンスク」より來る援兵を得、長驅して魯兵を追ひ進んで九月十四日遂に「モスコー」府の尖塔圓閣巍然として半空に聳ゆるを望めり、

全軍悉く踴躍大呼して曰く「モスコー府よ」皇帝亦悠然馬を駐めて曰く『著名の都市遂に我掌中に落つ』と暫くして續て曰く『時なる哉』と、

佛國大擧して敵都に入れり、何ぞ圖らん卅萬の都民既に齊しく去りて隻影を留めず、殘るは僅に貧窶羸弱の賤民のみ、自餘の士民は皆家財を携ひ糧食を齎し妻孥を率て、遠く四境に逃れ、四通八達の廣衢大道、闃として恰も一大墳墓の如し、佛軍相見て呆然たるのみ、魯人は先の計略を續け、佛の鋭鋒を内地に避けて其疲弊を待てり、「ナポレオン」本陣をクレムリン宮に据え、全軍をして府内に分據せしむ、夜は來れり、

夜半「ナポレオン」失火の聲に覺む、廣街已に火中にあり、焔勢盛なりしも數刻にして鎭火せり、然れども翌夜火復四方に起り炎々





烈風に乘じて各方相延き、百道の紅炎天を焦して全都悉く猛火に包まれ、崩壞爆發叫喚の聲騷然として名狀すべからず、佛兵全力を盡して消防に從へども、猛風益激しく火威益熾に激浪の狂ふが如く萬馬の驅くるが如く、焚燒四晝夜に亘り、「クレムリン」の宮殿亦火の近く所となり、「ナポレオン」幾回の躇躊の後、火災を犯し奔りて府外に出で、魯帝の離宮「ペトロスキイ」に駐る、都府五分の四悉く燒燼して廿日火始めて消ゆ是魯人佛軍を苦めんか爲め、自ら其國都を燒けるものなりと傳ふ、諸將乃ち帝に勸めて曰く猶時あるに乘じて軍を退け、以て此「不運の勝利」を棄つべしと、此奇異非常の言を聽きて「ナポレオン」躊躇し、迭々目を「パリ」と「センペータースブルグ」に向く、今や後者を去るを僅に一百五十「リーグ」、前者を去ること八百「リーグ」、後者に進むは勝利を完うする也、

前者に退くは自ら敗亡を認むる也、然れども大軍「モスコー」の焦士に露宿して軍糧に乏しく、加ふるに敵兵四邊に來侵して糧道を絶ち、又慓悍の「コサック」兵時々風の如く來て佛兵を困むるあり、軍情日に沮喪して、「ナポレオン」の英才大略亦施すに所なし、而して嚴冬又來れり、退軍は今忠告に非ずして命令也、十月廿二日百戰の勝利者全歐の覇王悄然頭を低れて「モスコー」府を去る、五十萬の大軍剩す所今僅かに十萬五千人、

魯軍「コサック」兵を先鋒として佛兵を追擊す、佛軍行々之を防ぎ廿六日「ボロヂノ」に着して、往日劇戰の蹟を見れば、積屍丘を爲して人の収むるなく、血は路上に印し、兵器は各所に散布して滿目悉く悽愴を極む、十一月二日「ウィアツマ」に達して又魯軍の追擊に遇ひ死傷相繼ぎ、又病を得饑に苦むもの多かりしも退軍の艱





辛未だ甚しと爲さず、然れども十一月七日に至りて、寒暖計俄然零下十八度に降り凍風冷霧霰雪相繼ぎて茫茫たる曠野たゞ一白の銀世界となり、道路の方向地勢の難易毫も探知すべからず暖國出生の佛人如何んぞ此酷寒に堪へんや、凍死斃死餓死戰死其數を知らず、十一月九日漸く「スモレンスク」に着し、進みて廿二日辛ふじて「ヂルガ」に到りし時は、十萬の軍剩すところ一萬二千に過ぎず、幸にして「ナポレオン」が嘗て遺留したる五萬の佛兵來りて此に會し軍威少しく振ひしも、「ベレシナ」河岸に又敵兵に襲はれ、敗殘の兵全く用う可らざるを見て、十二月五日皇帝軍中を去り橇に乘じ急行して十二月十八日巴里に入る、而して凱旋門下の歡呼又聽く可らざる也、「モスコー」退軍は古來戰史の最も慘悽絶なるもの也、後日親しく之を記錄せるもの曰く、

將官、士官、兵士皆一樣の裝服をなし列を亂して退却せり、艱辛の極度は一切の軍隊階級を消せしめ、騎兵歩兵砲兵皆混雜亂歩せり兵士の大部分は肩に小糧を荷ひ、腰に小壜を帶び、他は庖厨の具と僅少の糧とを荷へる疲馬を曳けり、馬死すれば、兵士の食となる、或は死するを待ず一度倒るれば兵士麕集して其肉を爭ふ軍隊は大部分皆分割せられ、九人乃至十人の少數各團隊を組み蹌踉として進めり、此等の隊は各孤立して他隊の人を加へず、隊の各員互に注意して誤つて失踪するとなからしめ誤つて失踪するものは他隊に加はるを得ずして其路を失ひ、遂に斃死せざるを得ず、試に十萬の疲兵長杖に扶けられ、惡虫の群がる襤褸を纏ひて、餓飢の禍に暴され、百般の困辛に因りて顏色憔悴形容枯槁鬢髮は亂れ目は凹み面は土に黑み煙に曇る狀如何を想へ即ち佛兵退陣の光景の萬一を髣髴たらしめむ、此處には力全く盡きて風雪裏に斃死するものあり、彼處には失望の餘他人に攫み掛りて糧を强奪せんとするものあり、一方には馬蹄の下に破碎せらるゝ屍躰あり、他方には呻吟の聲微かに路傍に絶息する兵士あり、





魯西亞の役佛軍の戰死者十二萬五千、餓寒病死の者十三萬二千捕虜となるもの十九萬三千、慘も亦甚だしと曰ふべし豈に一將功成らずして萬骨枯るゝのみならんや、噫、

## 第五　同盟軍

歐洲列邦の人先に皆以爲らく佛軍は常勝軍なり「ナポレオン」を敗ることは到底望む可らずと、此の如くして不可思議の圓光は從

來佛國の軍隊を掩ひき、而して今魯西亞役の大敗は是迷夢を破れり、積年歐洲を震懾せる佛人の威名は俄に挫折せり、是に於て普魯西は佛國に叛きて首先に魯と同盟を結び、國内至る處爭ひ立て佛兵を驅逐す、一千八百十三年三月普王「ブレスロウ」に於て魯帝と會し協力して佛國に當るの同盟を結ぶ、

「ナポレオン」巴里に歸り元老院の議決を經て新たに卅五萬の壯兵を募りて其迎ふ所を部署し四月十五日自ら首都を出で五月一日「ルッチェン」に至り、廿五萬の軍を以て「魯」「普」の同盟軍を討たんとす、敵軍思らく「ナポレオン」已に屈せりと、英雄豈一敗に屈せんや、猛虎は傷くも犬羊の敵に非ず、「ナポレオン」の第一擊は例に因りて猛烈なりき、決然たりき、「ルッチェン」の原上同盟軍の死傷一萬五千俘虜二千、佛の新兵は一舉にして老練の故兵と比肩せ





り、「ナポレオン」は先陣に進みて親しく砲烟の間に立てり、翌日令を出して曰く、

諸兵よ、余は汝等の勇敢を嘉ず、汝等わが期望に背かず、「ルッチェン」の戰は「アウステリッツ」「イエーナ」「フリードランド」「モスコウ」の諸役に勝らむ、一日にして汝等の敵の奸略を挫けり、吾人は夫の蠻人種を其故土に追はむ、願くは彼等をして、氷地の間奴隷野蠻腐敗の地、人畜共住の土に殘らしめむ、汝等は文明なる歐洲の感謝を享くべし、

佛兵敵軍を敗りて「ドレスデン」に入り「サクソニイ」王の位を復し五月九日「エルベ」川に橋梁を渡し、廿日敵兵を追ふて之を「バウツエン」の狹口に隘し、翌日討て之を敗り同盟軍の死傷一萬八千、生擒三千、敵軍漸次に退き、佛軍漸次に進む、廿九日魯普の兩帝使節

を遣はして、休戰を乞はしむ、佛兵十八萬の聯合軍に襲はるゝと聞き、己の隊より三萬五千人を分ち、敵軍其猶ほ「ブリユツヘル」を追討すと信ぜる間に、忽然電馳して「ドレスデン」に歸り敵軍の來襲を徼へて大に之を敗る、此際魯兵は全軍殆ど將に覆滅せんとし、漸く力を盡して死者四萬人を戰場に殘すの後遁逃す、此時「ナポレオン」自ら砲を定めて反將「モロウ」の雙脚を碎けり、此の如く「ナポレオン」の在る所佛兵皆全勝を得しも、夫の「ブリユツヘル」を追討せる「シレシヤ」の軍は二萬五千を失ひ「ベルリン」に向ひし佛軍は「ベルナドツト」(佛の反將瑞典の嗣王)に敗られ、魯墺を追ひし「ワンダーム」の兵は、反て其逆擊に敗れて、其報知聯合軍に達せるが故に、敵兵復た盛となり「ナポレオン」の大勝も徒勞に歸して得失相償ふに足らず「ナポレオン」屈せず進んで「マグデブルグ」に至りしが「バワリヤウルテンブルグ」の離叛に因て、其方略悉く瓦解し「エルベ」及「ザーレ」の間に聯合軍を追ひ「エルベ」及「オーデル」の間に戰鬪を開かんとするに代へて、佛軍は今「ライン」河上に退かんと決せり、然れども成らず、今墺は其同盟を替へんと欲し、永く中立の位置を保たんが爲め、調停者となりて六月四日遂に休戰の條約を結ばしむ、諸國の使節「プレーグ」に會して平和を議するも成ず聯合軍は佛國其境界を「ライン」「シユーゼ」に限るを求む「ナポレオン」之を以て佛を侮辱せるものとして可かず、和議遂に敗れて墺國亦佛に離る、戰鬪竟に已む可らず、是に於て佛帝四萬の騎兵と廿六萬の步兵を率て「エルベ」の左岸「サクソテー」の中心を占領す、英墺魯普及瑞典の聯合軍は騎兵十萬步兵四十萬の大軍を合して「ベルリン」より「シレシヤ」より「ボヘミヤ」より三面齊しく來

攻す「ナポレオン」佛軍の數少きを顧みず、平生の神速を以て攻擊の姿勢を取り、全軍を三隊に分ち、一は「ベルリン」に向けて普瑞の聯合軍に當らしめ、第二隊を「ドレスデン」に留めて「ボヘミア」に於ける魯兵を防がしめ自ら第三隊を率ゐて普の將軍「ブリッヘル」を襲ふ「ブリッヘル」佛軍の鋭鋒を支ふる能はずして、敗走す「ナポレオン」進んで之を追擊せる際、偶々「ドレスデン」に殘せる六萬の軍兵退却の際敵軍をして追及するを得ざらしめんが爲め先づ聯合軍を敗らざる可らず、故に敵を遁るゝに代へて敵に向ひ、十月十六日進んで「ライプチッヒ」に至る佛軍戰士十五萬七千大砲六百門、聯合軍の戰士卅五萬、大砲一千二百門、此日戰鬪八時間佛軍勝てるにも「ドレスデン」より來て敵の敗亡を全ふすべき援軍遂に至らず、十七日魯墺援軍を得、十八日來り侵す、四時間戰爭佛





に利ありしが要衝に當る三萬の「サクソン」人叛て敵に赴き、六十門の大砲逆さまに我軍を襲ふ、局面の變化誠に恐るべし、然れども英邁の「ナポレオン」電の如く駿馬を驅りて平生の猛勇を現し、手から親兵を率ゐて「サクソン」人を攻め北ぐるを追ふて其裝藥の大砲を奪ひ、直ちに之を以て叛軍を碎く、聯合軍恐れて退き、二日の間に精鋭の兵を喪ふこと十五萬其夜佛軍戰場に宿れり、第三日に至りて一士官驚くべき報知を「ナポレオン」に齎らす、曰く砲彈殘るところ僅かに一萬六千發のみと、前者に報ぜしところ二十二萬發兵士猛なりと雖も施すに所なし、午前二時佛軍陣を拂て退く、敵軍勝てり佛軍の退くを訪かりしも、之の退陣を利して早曉佛の後軍を襲ひ、追て「ライプチッヒ」に入る、佛兵行く〳〵之を禦ぎ「エルステル」河上の橋に向ひしが、偶兵卒等誤て火藥を爆

發し之の橋を焚燒せり、四萬の佛兵廿萬の墺魯兵に追れて急流激湍に厄せられ、溺るゝもの戰死するもの其數を知らず「エルフルト」に至れば屬邦の兵皆散じて殘るは佛の本國兵八萬人あるのみ、是より急行して十一月九日巴里に歸る、歸れば離叛相繼で起る、先には獨乙の背くあり、伊太利の去るあり、今や佛の本國人又彼に叛かんとす、列邦と和睦の條件を議するに當り佛國の立法院「ナポレオン」に抗して解散せらる、而して列邦の意志は素時を延ばすにありき、乃ち此會議を中止して他の會議を指名す、是侮辱なり、挑戰なり「ナポレオン」安んぞ之を默受せんや、一千八百十四年正月廿五日皇后皇子を國民護衛軍に托してまた巴里を出づ、帝國は今四邊來侵を被り、墺人は伊太利に進み、英人は半島より來て「ピンチース」の山頂に現はれ、墺將「シワルチェンベル





グ」は十五萬の大兵を率ゐて瑞士を通過し來たり「ブリユッヘル」は十三萬の普兵を督して「フランクホルト」より進み「ベルナドット」は已に和蘭を侵擊して今一萬の瑞典人「サクソン」人を率ゐて「ベルザアム」に入らんとす、七十萬の大兵、ナポレオン戰爭の學校に訓練せられしもの四方より群り來て今一齊に巴里を陷れんとす「ナポレオン」今深沈不動全世界に反して立てり見兵今只十五萬、然れども彼今壯年の活氣を回復し來れり、一千八百十四年の戰爭は「ナポレオン」が作戰の最妙なるもの也、

眼光一閃彼は一切を理解せり、彼は人力の極を窮めて此難局に當れり、乃ち諸軍を部署し「メーゾン」をして「ベルザアム」に「ベルナドット」を防がしめ「アウゼルウ」をして「リオン」に墺兵を止めしめ、「スウル」をして「ロアール」河に英軍を禦がしめ、「ユーゼーン」をして

伊太利を禦がしめ、自ら殘兵を督して「ブリユツヘル」及シワルザエンベルグ」に當り、迅雷風動の猛勢を以て六萬人を督して二人の間に殺倒して、「ブリユツヘル」の軍を粉碎し、十日にして五回の勝利を得同盟軍を亡ぼすこと九萬人、是に於て和議復起りしも、列王の要求は漸次に酷にして、獨り「ナポレオン」が多年戰勝の領地を削るのみならず、前年共和政府時代の境界をも狹めずんば止まず、「ナポレオン」は之に答ふるに猛獅の一躍を以てし、「セイン」河上の「メサイ」より「クラオン」に奔り、「クラオン」より「ライム」に馳せ、「ライム」より「セイント、デヂール」に馳け到る處迎ふ所の敵軍を擊破す、然れども其去る後敵軍また麕集し、いよ〳〵敗ればいよ〳〵增加せり、「ナポレオン」の在る處佛軍必ず勝ち、「ナポレオン」在らざる處佛軍必ず敗る、英軍は「ボルドー」に入り、墺人は「リオン」を占領





し、「ベルヂアム」軍は「ブリユツヘル」の殘兵に合して其背後に出で、三月廿九日に至りては普兵魯兵相合して將に巴里に入らんとするの報、「ドロイ」に「ナポレオン」に至れり、皇帝直ちに此地を去り、四月一日、「フオンテインブロー」に達すれば報あり曰く昨日國都守を失ひ光榮の巴里遂に敵軍の手中に落つと已哉、

聯合軍已に佛都を陷れ宣して曰く、皇帝「ナポレオン」は一般平和に對する唯一の防碍なりと、「ナポレオン」之に於て爲す所二あるのみ、一は「ハンニバル」に倣ふて毒を呑むにあり、他は「シルラ」を學びて位を去るにあり、「ナポレオン」第一を撰べりと傳ふ、然れども藥効無し、之に於て第二を取り、片紙に手書して曰く、

『歐洲全局の平和に唯一の障碍は皇帝「ナポレオン」也、この列邦の宣言により皇帝「ナポレオン」は自個及其繼續者をして佛國

及び伊太利の王位を棄てしむ、佛國の爲めには彼一切を犧牲に供すべければ也』

絶大の巨人一たび跡を收めて天下は今殆んど空虛也、

## 第六　復位

聯合諸國の帝王商議して以太利沿海の「エルハ」島を以て「ナポレオン」の居となす、一千八百十四年五月四日先の佛蘭西皇帝兼以太利王其屬に別れ、其軍隊に分れ、少數の侍者を從へ航して此の一小島に着けり、眸を放てば烟波縹渺として窮まりなし、光榮の故國今何の狀ぞ、蓋世の英雄豈に默々として積歲の大業一朝冷灰に歸するを坐視せんや、「ナポレオン」捲土重來の氣山の如く、偵して佛國新朝「ブルボーン」忽ち民心を失へるを知り一千八百十





五年二月二十六日英國監督官の不在に乘じ侍從の兵士を招集して將に佛國に歸ちんとするを告ぐ、佛蘭士の名を聞き、歸航近きにあるを聞て、兵士等歡極つて哭し互に雀躍抱擁して恰も狂せるが如し、此日數艦の舟を艤し、千人の從兵を率て「ナポレオン」は「エルバ」を脱せり、航泊中「ナポレオン」自ら、佛國民及び佛國軍隊に示す二通の告文を草し、文字あるものを悉く集めて忙手之を謄寫せしむ、三月一日佛國の南岸「カンヌ」に着し、三日「バレーム」に四日「ディギュ」に五日「ガフプ」に着し、告文を數千枚印刷して沿道の民に散布せしめ、進んで「ラシュール」「ヰヂーユ」の境に入れば、一隊の佛兵險によりて「ナポレオン」隊の進入を禦げり、皇帝小丘に留まりて之を伺ひ、將軍「ナルトラン」に向て曰く、彼輩余を防がんとす、然れども事何かあらん、只宜しく進むべきなりと、因て馬を

下り、小流を渡りて直ちに隊に向ひ其將「マルシヤン」の部下劍を拔きて發砲の令を下さんとする瞬間「ナポレオン」高く呼んで曰く『何事ぞわが友輩汝等余を認めざるか、余は汝の皇帝也、汝等の中もし其大將を殺さんとするものあらば」之を爲せ、余こゝにあり』と、言未だ終はらず、『皇帝萬歲』の聲一齊に隊中より發し、諸兵隊を亂し、爭ひ馳せて皇帝の足下に俯し其手に接吻し歡呼喝采狂ふが如し、是より直ちに前途を追ひ行て「ポヂーユ」より「グレノーブル」に赴く、途に急驅の一士官に遇ふ、彼齎らす所何ぞ、是日午後二時佐官「ラバトーエー」第七步兵聯隊を率ゐて、皇帝を禦がん爲めに「ガレノーブル」を發せり、然れども市を去る一兩里にして佐官駐軍を命じ、自ら鼓を取り驚章旗を飜し、鞍上に立て諸兵に語て曰く『あゝ諸兵よ、不朽の戰爭中に吾人を導ける此光榮の旗章





を見よ、彼れ嘗て吾人を戰勝に導けるもの、今や進み來て我薄倖と屈從とに復仇せんとす、今は彼の旗下に馳すべき時也、吾人は常に其旗を守るべき也、余を愛せんと欲するものは請ふ余に隨へ『皇帝萬歲』と、全軍擧て彼に隨へり、急驅の士官は是の好報を齎らせるなり「ナポレオン」馬を驅りて進み、其小隊呼び走りて之に隨ふ、一小丘の頂に達して彼等「ラペドイエー」の聯隊の急馳し來るを見る『皇帝萬歲』の聲直ちに陣中より起り「エルバ」島の諸勇士亦之に和して歡聲恰も雷の如し、諸兵皆狂せるが如く、隊を去り列を亂りて踴躍す「ラペドイエー」馬より下りて皇帝の膝を抱く、帝彼を懷きて勞して曰く、余を帝位に復置する者は、汝なりと「ラペドイエー」歡んで狂せるが如し、此懷抱は彼が一生を價せん、然れども是何かあらむ、皇帝より此の如き辭を聞くは、百歲の生を

得るに等しきなり、聯隊急行して「グレノーブル」の城下に達す、時正に黄昏「ラベドイエー」丘上に立ち、高聲に呼んで曰く、諸兵よ、吾人は今從來百千の戰場に汝等の隨へる英雄を伴ひ來れり、彼を享けて而して舊時歐洲戰勝者の合集暗號皇帝萬歳と唱ふは汝等の宜くすべき處に非ずや」此叫は獨り城壁上のみならず普ねく市中に傳播せり、衆中皆城門に突進せしも、鍵は守將の有せる所なるを以て門は開く能はず、門外には「ナポレオン」の兵士麕集し、内外音を交へ格を通じて握手す、忽ち「トレイクロアートル」の全市民叫喚を發し、器械を携へ來りて門を破り、六千の市民怒潮の如く溢れ出づ、既に是熱情にあらずして暴怒なり憤激なり、全民恰も彼を粉齏せんとするが如くに「ナポレオン」を目懸けて突進し、彼を馬より下し、狂叫して擔ひ運べり、此夜彼旅館に宿し





て夫の告文を飜刻せしめ、普く之を四方に傳播せしむ翌日地方の僧侶官吏等來て謁を取り了りて、鎮臺六千人の觀兵式あり、次日益高まる群衆の歡叫に伴れて「リオン」に向へば「ブールボン」家の王族こゝを守れる者已に遁竄し、城兵鋒を倒にして皇帝を迎へ、帝國第二の大都府已に「ナポレオン」の手中に落つ「リオン」に留ること四日にして、十三日此市を出て途に「勇中の勇」なる元帥「チイ」の歸服を得、三月二十日「フオンテインブロー」に着し、其夜八時半無數の群集に伴はれて「チユウレリー」の宮殿に此奇異なる進軍の終りを告げたり、文武の官吏大小の廷臣、今其夢寐忘れざる英雄の至るを見て歡喜に堪へず直ちに「ナポレオン」を佛國皇帝と宣し、一滴の血流なくして革命は忽然一日に完成せり、

## 第七　「オーターロー」

「ナポレオン」位を復して内閣を改造し、憲章を發布し、鋭意治を圖り、衆心の安堵に勉むると同時に將來の成敗全く軍兵の利鈍に關するを以て令を全國に布き壯丁を募りしが、二ヶ月ならずして隊に加はるもの二十萬に及べり、歐洲の聯邦は是より先き、墺都「ウインナ」に會して、境域領土の分割を商議せしが、今「ナポレオン」の迅雷耳を掩ふに遑なき擧動に接して、且驚き且怒り、彼を目して平和の破壞者人道の公敵と罵り、急に征討の師を起して之を鎭壓せんと決議せり、墺國三十萬、魯國二十二萬五千、普國二十三萬六千、獨乙小聯邦十五萬、和蘭五萬、英國五萬、合して百〇一萬一千人、是二十萬の新募兵が對抗すべき敵の聯合軍也、





「ナポレオン」若干の兵を留めて巴里及「リオン」を固めしめ他に「メッツ」及瑞士の境に二將を派して「ライン」上流の墺將「シワルチエンベルヒ」を支へしめ、而して自ら精鋭を率ゐて「ベルザユアル」に入り、北方の敵兵來て「マンハイム」の邊に、「ウエルリントン」及「ブリユッヘル」の隊に合せんとするに先ち、墺英の軍を破らんとす、一千八百十五年六月十一日巴里を發し、十四日「ボーモン」に本營を据ゑて悉く諸兵を撿閲す、是想ふに從來「ナポレオン」の率ゐし軍隊中（數は大ならざれど）の最選最鋭なるものなり、即親衛兵二萬五千、最良の騎兵二萬五千、大砲三百門、及歩兵八萬、「ナポレオン」全軍に令して曰く、「此日は「マレンゴー」及「フリードラド」の紀念日にあらずや、敵は舊時の敵に非ずや、我は舊時の余に非ずや、あゝ夫の狂人輩片時の勝利に眩せり、佛蘭士國民を鎭壓するは彼等

の能くする所ならんや、彼等佛國に入らば自己の墳墓を得んのみ、あゝ諸兵よ、吾人は前面に進軍戰爭先難を扣ふ、今は心ある各佛人の勝つべき時なり、然らずんば其死すべき時也』と、是時に當りて普の將軍「ブリユッヘル」十萬の兵を率ゐて「サムブル」河上にあり、其右翼は「ウエルリントン」が率ゐて「ブラッセル」に屯せる七萬五千の「英比」聯合軍の左翼に接して、緩急互に相援くるを約す、六月十五日昧爽佛軍進んで「サムブル」河を渡り「ブリユッヘル」の未だ備へず「ウエルリントン」の援兵未だ來らざるに乘じて、急に「ブリユッヘル」を破らんとす、普の部將「ナイテン」力を盡して之を「シヤルロア」に禦ぎ、警報既に普の全軍に傳す、「ブリユッヘル」は今「リグニイ」に陣し、部將「ビユーロー」の一隊未だ到着せざるものを除きて全軍悉く其陣前にあり「ナポレオン」は敵已に備へあるを見



るも、猶其英軍との交通を絶たんとして「シヤルロア」より「ブラッセル」に至る通路を進み「ナツソー」の兵を擊退して「クアートルブラ」に至る「クアートルブラ」は「四の腕」の義なり「シヤルロア」より「ブラッセル」に至る道と「ニベール」より「ナムール」に至る路の合する點なるを以て是名あり、然るに英軍疾行して「ブラッセル」より來て已に之に屯せり、十六日「ナポレオン」軍を三隊に分ち、右軍は元帥「グルウシー」四萬八千を率ゐ、中軍二萬八千は皇帝親ら之を督し、左翼は元帥「チイ」四萬八千を督して進み、右軍中軍相合して「ブリユッヘル」を攻め左軍は離れて英の援軍を支ふ「ブリユッヘル」八萬の兵佛の激烈なる攻擊を受け一進一退遂に佛軍の破る所となり、普將兵を收めて「ワーブル」の方面に退却せり「ナポレオン」は普兵の退却を確知し「グルーシー」をして三萬二千人を率ゐて

之を追擊せしめ、自ら轉じて「子イ」の軍と共に「クアートルブラ」より「オーダーロー」に退ける「ウエルリントン」に向ふ、

一千八百十五年六月十七日夜に當りて佛軍及聯合軍の位置左の如し、

皇帝「ナポレオン」は「ブラッセル」より「クアートルブラ」に通ずる大路を占領して「ブランシノア」の前後に陣し、第一第二第六の歩兵隊大將「スウバルビー」の輕騎兵一隊「ミロー」及「ケラルマン」の胸甲兵及龍騎兵及親衛兵、大砲二百四十門を率ゆ

英將「ウエルリントン」は本營を「オーダーロー」に設け「ブレインラユー」より「ラヘイサン」に至る迄丘上を占領し、八萬の「英比」(比はベルヂユーム)聯合軍及び二百五十門の砲を率ゆ

「ブリユッヘル」は七萬五千人を蒐集して「ワーブル」にあり、砲聲を



聞く所に進すんで英軍を救はんとす「グルーシイ」は先に普軍を追擊せしが道に其踪を失ひて「ゼムプルー」に在り、此夜十時「ナポレオン」急使を「グルーシイ」に派して英軍の位置を報じ、又命じて曰く日出に先つ二時間にして、七千の兵と十六門の大砲を分遣して「セイントラムベール」に進み、本軍と連絡して英軍の左翼を擊て「ブリユッヘル」「ワーブル」を棄て去らば、之が追擊を爲さず、直ちに全軍を擧げて「ラムベール」の分隊の跡を追ふべしと、

拂曉「ナポレオン」陣を出て敵狀を察す、彼先に思へらく「ウエルリントン」夜に乘じ普軍と共に退きて「リアギー」の森に據りしならむと、事豫想に反して英比の聯合軍前夜と等しく丘陵に據りて固守せり「ナポレオン」只一瞥見を與へ、侍臣に語て曰く、今日の勝敗は「グルーシイ」の來着如何に因る、彼若し我が命令に從はゞ百

中の九十は我軍の勝なりと、前日の强雨此日の朝八時に霽れ、道路檢査の命を奉ぜる砲兵士官復命して曰く、路將に乾かんとす、一時間にして砲隊の進擊するを得べしと、此に於て「ナポレオン」先に朝餐の爲め馬を下りしが今直ちに鞍上に跨がり「ラベルアリアンス」の方向に赴きて、敵陣を伺ひ敵溝渠を穿ちしやと疑ひ、一將官を遣はして近きて之を偵せしむ、將官復命して曰く、溝渠なし、敵軍たゞ丘陵に據るのみと、隊伍を整へ、各兵皆號令を待つ、皇帝駿馬を驅りて陣前を過ぐれば到る所軍樂響き歡聲大に起る、是皇帝が戰爭を始むるに當りて一般の習慣恰も祭例の如き也、敵軍は冷々たりき我軍に於ける如く、全隊の熱情を起すもの一員も中に存せざれば也「ウエルリントン」丘上の樹上に凭り眼鏡を手にして佛軍の感激憤起、死を決して皇帝の命を奉ずるを





見たり、

「ナポレオン」歸りて「ロツリンム」の丘に馬より下りて戰場の全景を眺めたり、其後に軍樂歡呼猶已まず、已にして一同寂然として聲なし、大戰今正に始まらんとす、

忽ち此寂寞を破りて佛軍の左翼に銃聲起る、是「ゼローム」が英の右翼を「グールモン」に襲ひて敵の注意をこゝに向けんとするなり、英軍直ちに大砲を發して之に應ず、佛將「レイユ」「ホーイ」隊の砲軍と共に進み「ケラルマン」亦十二門の輕砲隊を驅て前進す、同時に佛の右軍中軍より一隊の兵進んで「ゼローム」を援く、

「ナポレオン」眸を放て此首先の運動を目擊せるとき、夫の「ラベイザン」の中軍攻擊を主ごる元帥「子イ」使を馳せて一切の準備悉く成れるを報ぜしかば「ナポレオン」直ちに進軍の令を傳へんとし

て更に全局面に最後の瞥見を投ぜし際、偶「セイント、ラムベール」の方向に當て霧中に黑點を認む、彼何物ぞや參謀員各眼鏡を手にして之を熟視し、或は曰く樹木なり、或は曰く人なりと、而して其軍隊なるを初めて認めしは「ナポレオン」也、然れども「グルーシイ」なるか、或は敵「ブリユッヘル」なるかを知らず「スウル」以爲らく我軍なりと、然れども「ナポレオン」猶疑ひ、將軍「ドモーン」に命じて曰く、汝自己及將軍「スウバルヴイエ」の輕騎兵隊を率ゐて夫の隊へ向へ是若し我軍ならば共に合すべく、敵の先鋒ならば之を支ふべしと、是に於て三千の騎兵一號令の下に長蛇の如く進發す、

此運動終ると同時に、我軍の斥候隊「ワーブル」と「プラシーア」の間に普の一兵卒を擒して彼を皇帝の目前に連れ來る、彼は普將「ビ





アロ、ロー」が今「セイント、ヲンベール」を經て進むを「ウエルリント」に報ずる使也、是に於て佛人先の黑點の何たるを悟れり、又此俘虜の言に因れば今朝普軍の三隊は猶「ワーブル」にあり、毫も「グルーシー」に支へられず、即ち此方面に一人の佛人あるとなき也「ナポレオン」是報に接し元帥「スール」に向て曰く、今朝我軍は百中九十の勝運を有しき、今「ビユーロー」の到着は吾人をして冊を失はしむ、然れども尙六十の機會あり、而して「グルーシー」若し昨日「ゼムブルー」に彷徨せる失敗を償ひ、速かに吾人に其援兵を送らば、我勝利は一層決然たらむ「ビユーロー」の隊全敗すべければ也と、是に於て又急使を馳せて「グルーシー」の來援を促し、又將軍「ロボウ」をして一萬の兵を率ゐて右方に進みて三萬の普兵を支へしむ、令卒りて「ナポレオン」眼を又戰場に向く、全線已に銃を放て

り、然れども今大事なるは、獨り我左翼の「グーモン」攻撃のみ、英軍は其中軍より一團の兵を遣はして右翼の援となせしも、他の全線は未だ動かず、而して其極左端に「ビューロー」の普軍已に來り會せり、此時に當りて「ナポレオン」元帥「子イ」に令を遣はして曰く直ちに砲撃を始めよ、「ラヘイサン」に進み銃鎗を以て之を奪ひ、玆に歩兵の一隊を殘して直ちに「パープロット」及「ラヘイ」の村舍に突進し、英軍と普軍とを分離せんが爲めに彼等を追攘せよと、須臾にして八十門の砲轟然として此命令の施行を報ぜり、佛將「エルソン」(「子イ」の部下)進んで英軍を中斷せんとせしが、低地を超ゆる時砲車泥濘に陷りて又進むこと能はず、「ウエルリントン」丘上より是を望み騎兵大隊を遣はして之を逆撃せしむ、騎兵分れて二隊となり、一は「マルコーギ」隊に向ひ、一は夫の泥濘に困しむ砲



隊に向ひ、佛の兵を惱まして二流の旗を奪ひ、砲手を斬り砲鎖を斷ちて勇氣益〻盛なり、我が七門の大砲已に効なし、「ナポレオン」之を視て將軍「ミロウ」の胸甲兵に急令を下して、進んで其同胞に應援せしむ、生ける鐵壁今や勝に誇る英軍のたゞ中に殺倒して恰も怒潮の寄するが如し、英軍遂に退却して我軍再び進撃す、是より先き「子イ」は、其右翼此の激烈の抵抗を受くる間に左翼の一隊を進め、猛烈の攻撃を以て「ラペイサン」に據りしが、今「ミロー」の胸甲兵又來りて英の殘兵を「ブラッセル」の途に攘へり、此時に當りて左翼は「ゼロームム」「グーモン」の森の一部を攻略し、英兵殘壘に因て猶固く支うるが故に、此方面は半勝なり、中央に當りては元帥「子イ」已に「ラペイサン」を奪ひ英の砲兵騎兵の抵抗に關せず、此處を固守して勝利は已に十分也、右翼に我軍の一隊は「パープロ

ナポレオンの戰

ット」及「ラヘイ」の農舍を奪はんとす、勝敗未だ明ならず、極右端に當りては將軍「ドーモン」「スウバルビー」及「ロボー」一萬の寡兵を以て普將「ビユウロー」の三萬の兵に當る、此を以て此方面は全軍中今尤も危殆也、「グルーシイ」昨夜の約に因れば今日拂曉來援すべかりしもの、今午後四時半に至るも尚來らず、然れ共「ナポレオン」思へらく七時半に至らば遲くも彼來援すべしと、故に其時刻まで力を盡して特に「ビユーロー」の軍を支へざるべからず、之に於て「ナポレオン」將軍「ヂユエスム」に命じ、八千の兵と廿四門の砲を率ゐ「ロボー」の軍を救ひて「ビユーロー」を阻遏せしめ又同時に「ヲイ」に令して英の中軍を襲ひ「ラペイサン」より進んで「モン、サンジヤン」の高丘を奪はしむ「ミロウ」の胸甲兵是が先鋒に進みて丘上に馳せ「ウエルリントン」の騎兵及び步兵方陣に向ふて奮鬪す、佛



軍今精鋭を中心に集め「ミロウ」を援はん爲め「ナポレオン」は「ワルミー」の胸甲兵二隊を派し「ヲイ」又將軍「ギユーヨー」の重騎兵を派す、親衛三千の胸甲兵「キユーラッシイル」親衛三千の龍騎兵(ドラゴーン)言を換ゆれば天下第一の精兵疾風の如く馳せて英の方陣を襲ふ英軍死力を盡して堅く丘上を守り防禦數刻に亘りしも、佛兵の勇益々加はりて英の十三方陣中已に六陣を粉碎し、又英の騎兵と馳突して、奮戰亂鬪益々盛なり、はやこれ戰には非ず暗黑なり狂飈なり、靈魂と勇氣との漩渦なり、劍光電閃の颶風なり、英兵潰散の狀已に崩して「ウエルリントン」死を決して自ら陣頭に立ち將士を叱咤奬勵して一步も退くなからしむ、天漸く暮る『夜か或は「ブリユツヘル」か』冷靜なるしかも顏色蒼然たる鐵公將軍が(アイアルンヂユーク)當時侍者に曰ひし言此の如かりき、

「ナポレオン」今や全勝を目前に扣へて丘上に立てり、偶々「ワーブル」の路に當りて一隊の軍馬殺倒して出づ「グルーシイ」來れり、我軍大勝と言未だ終らず新來隊の前面砲聲轟雷の如く彈丸英普軍に向はずして「ナポレオン」陣後の親衛兵に向へり、「ナポレオン」の周圍に立てるもの呆然として醉へるが如し、あゝ彼れ「グルーシイ」に非ず、普軍の大總督「ブリユッヘル」なり、

垂成の克勝暴かにこゝに至る、佛軍の運命已に定まれり、後陣の親衛兵今起てり、長槍隊、龍騎隊、胸甲隊、大砲隊正に是れ「フリードランド」の勇士「イエーナワグラム」「アウステリツツ」の勝利者皆死の免れざるを覺悟し、一齊に「皇帝萬歳」を叫びて起ち、陣頭高く軍樂を奏し、悠然急かず慌てずして砲彈霹靂の裏に恰も蠟の熔くるが如く沒し去れり、殘餘は惶惑なり、絶望なり、亂走なり



大軍一度崩れて又收拾すべからず、皇帝馬より下り劒を提げて亂軍中に進まんとす、「ゼローム」是に從ふて曰く吾兄の爲すところ可なり、「ボナパルト」の名を帶べるもの皆玆に斃るべしと、前後の士官將校之を隔て進めしめず、再び馬に上せて一士官其轡を取り急奔して戰場を去らしむ、近世史上の最大戰「オーターロー」の役此の如くして終れり、首を回らせば英雄の覇業眞に是れ一夢、

六月廿一日「ナポレオン」巴里に歸れり、

廿二日「ナポレオン」位を退けり、而して皇位を其子に嗣がしめんとす、然れども其後者の議は佛國議院中多數のもの承諾せず、

七月八日「ブルボーン」家の「ルイ」十八世再び巴里に入れり、

十四日「ナポレオン」海岸に至り英艦「ベラホロン」に投じ書を英政

「セントヘレナ」嶋ノ景
不折山人

府に致して曰く、

國内黨派の分裂に遇ひ、歐洲諸國の憎疾を受けて、余は政事上の生を終れり、今古「セシストムルス」と等しく英國人民の厚意に據らんとす、余は我が舊敵中最も強く最も寛大なる英國法律保護の下に身を托す』と

七月十六日「ベラホロン」英國に向て航し、廿六日「プリマウス」港に入る、廿日英政府の使來て「セイントヘレナ」流謫の命を傳ふ「ナポレオン」怒りて抗辯書を草して曰く『余は今英國政府の無道に抗す、余は故意に「ベラホロン」に來れり、余は囚人に非ず、英國の賓客なり、而して英の擧動此の如きは何ぞや、千歳の後歴史の言夫れ何とか曰はむ、尤英人は其敵を禮せんと詐れり、信じて之に身を托せば英人彼を縊殺せり』と此抗言にも關せず八月七日英政府



は彼を「ノルザムバアランド」號に移して且其劒を奪ひ同日遠く彼を「セントヘレナ」に謫せり、

一千八百十五年十月十六日、大西洋中の一孤島「ナポレオン」を受けたり、英政府彼を視ること檻中の猛虎の如く、苛察酷薄至らざる處なし、千古の英雄恨を呑んで、蠻烟瘴霧の中に幽囚の生を送ること六年、末路の慘悽眞に筆するに耐へず、一千八百廿二年五月五日熱帶地方の暴風雨の裏先の佛蘭西皇帝兼伊太利王遂に人界の大夢を終れり。

# 附錄

## 馬前の夢

左の一篇は著者が嘗て「ナポレオン」を詠じたるもの、今本書の附錄として讀者の一粲に供す、

おほ空涵すわだの原　波間の星は影消えて
天地をこむる暗の色　暗を掠めて夜あらしは
時こそくれと狂ふなる　魔神の叫ものすごや

やがて降りくる雨の音　雨に答ふる波の音
銀山碎け飛び散りて　暗にもしるき汐烟り
白衣の幽鬼群がりて　よみに迷ふに似たるかな

風雨いよ〳〵荒れ行きて
世の有様もまのあたり
雷車亂るゝ雲のへに

嗚呼すさまじの雨の夜
歌ひ弔へはなれ島
かしらは今はうなだれて

疵に惱みて砂原の
檣折れてわだつみに
紅蓮の焔しづまりて

四大のあらび渾沌の
夜の惱みをいやまして
魔炎の光りたれか射る

あらしも波も聲あげて
至尊の冠いたゞきし
かれはいまはの床にあり

月に悲む荒獅子か
沈み消行く大船か
雪に掩はるゝ死火山か





馴れ來し邦をとも人を
都の春の一夢を
見よ蓋世のますらをは

名は一代の史をまとめ
嫉むを挫き仇を擊ち
世に注ぎしも二十年
あらしに魂の迷はんと

十萬の鉄馬㊀アルベラの
三千の精騎㊁ルビコンの
彼に比へんものやたそ

隔てゝ遠き離れじま
磯のあらしにさまされて
いまはの床に眠れるよ

身は全歐の權を統べ
暗と光のおほ波を
今はた狂ふ雨の夜
思ひやかけし神ならで

あらしを蹴りて驅けし後
流亂して越えし後
群山遠く下に見て

空に聳ゆるアルプスの
斷頭臺の血を灑ぐ
現はれいでしダイタンの
「民主自由」の聲いつこ
しばし隻手にとゞめけむ

そら舞のぼる蛟龍の
風に嘯き呼ぶがごと
進める君が行先を
颶風の翼身に借りて

高きは君の名なる哉
革命の波推しわけて
まばゆき光照らすとき
渦づく時世の高しほを
猛きは君の威なるかな

黑雲集め雨を驅り
山を震はせ海をほし
拒きとゞめしものやたそ
征塵高く蹴たつれば





脆く亂るゝ㊂マメリューク
四千餘年の幽魂は

㊃サン、ベルナアの嶺高く
響きは凄しアバランナ
見おろす大野草青く

㊄オーステリッの朝風に
至尊の指揮に奮立つ
君の鋒先向ふとき

㊆イエーナ、ワグラム雲暗し

奔るを逐ふて呼ぶ聲に
覺めぬ巨塔の墓の下

雪滿山を埋むれば
難きをしのぎ險を越え
馬は肥たり㊅マレンゴウ

同盟軍の聲高し
二十餘萬の墺魯軍
散りぬ嵐に葉のごとく

㊇フリードランド風あらし

いかづち落つる砲彈の
君が、かざせる鷲の旗
列王つちに膝つきて
震ひよどめり海のごと

セインの流靜かなる
みどりの空に聳立つ
君のみいつに比へんや
歡呼の聲は雷のごと

花ひと時の香ににほふ
富もほまれもみいづるも

渦卷く烟かきわけて
飛電のつるぎ閃めけば
見よもろ〳〵の國たみは

岸の柳の淺みどり
凱旋門は高くとも
みかごの還御壽きて
パリ滿城の春の歌

脆きはいづれ世の定め
とはの契りをいかにせむ





「不能」の文字を笑ひしも
玉樓の春短くて
花はうらがれ香は消え
君蓋世の勇いづこ
吹雪は亂る㊇ボロヂノウ

フランス國の金笏か
全歐洲の大權か
夕日の影は㊥クレムリン
名殘りの光まばゆくも

嗚呼君遂に神ならず
魚龍淋しき秋の水
ほまれの星も落行けば
焰は狂ふモスコウ府

ロムバアディの鐵冠か
榮華のはてと今ぞ見る
古宮淋しき塔の上
雲をつんざき現はれし

ヲーターアローの丘の上
見ずやかなたの㊥金獅像
君がいまはの勇なり

光りわたらぬ隈もなき
獨り小じまの波枕
千鳥の聲にさめし時

「悟り」よいづれ「薄命」の
月日は空にかゞやけど
とはに光の消ゆることも

敗れも何か恨むべき
語るは敵の勝ならで

其常勝の劍折れて
夜毎の夢もあかつきの
君や悟れる「命なり」と

遂に受くべきあだし名か
塵の惱みはしづめ得じ
盲目は見るを忘れんや





夕幾度波の上
入日の影の消えし時
心の暗も打まぜて

月日の流れ世のさだめ
忍ぶ思の數々は
夜の黑幕の垂るゝごと
猛き心も亂れずや

惱む思を靜めむと
今こそ寄すれ死の影は
まだしづまらぬ魂の

錦をひたし綾を布く
沖より寄する暮の色に
君が無量の感いかに

返らぬ昔今更に
たゞ大潮の湧くがごと
胸に逼ればくろがねの

(謝せよ)歩みの音かろく
あはれいまはの床の上
夢はいづこを驅くるらむ

生れし里は波のいづこ
離れ小じまの雨の夜に
いまはのあとは灰のごと
むくろと共に葬むりて

雨とあらしの樂のねに
惱める魂を導きて
苦む影に休みあれ
罪と惱みを葬りて
ほまれは彼の墓にあれ

世界歴史譚
第二十二編
那破翁 終

なれし都は雲の幾重
過ぎし榮は火のごとく
其喜も悲も
眠につけや夢もなく

こゝに有象の海恨み
かれに無象のかご開く
別るゝ魂に惠あれ
あゝ比なくかんばしき



明治三十四年四月十一日印刷
明治三十四年四月十四日發行

(那破翁)
定價金拾參錢

著者 土井林吉
發行者 大橋新太郎 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 水谷景長 東京市本郷區丸山福山町六番地
印刷所 合資會社博進社工場 東京市小石川區久堅町百〇八番地

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

許可 博文館 複製

# 世界歴史譚

世界に於ける英傑碩學名士の事蹟を何れも方今知名の文學大家が執筆したるものにして文章流麗項々王の如く挿畫又和洋第一流の畫伯が靈腕を振へたる者蓋し少年第一の讀本たるべし。

## 既刊目次

- 第一編……釋迦　全壹册　文學士高山林次郎君著　横山大觀君畫
- 第二編……孔子　全壹册　文學士吉國藤吉君著　中村不折君畫
- 第三編……耶蘇　全壹册　文學士上田敏君著　中村不折君畫
- 第四編……ビスマーク　全壹册　法學士笹川潔君著　小坂象堂君畫
- 第五編……ハンニバル　全壹册　文學士大町桂月君著　渡邊審也君畫
- 第六編……マホメット　全壹册　文學士阪本健一君著　北蓮藏君畫
- 第七編……漢高祖　全壹册　文學士三浦菊太郎君著　北蓮藏君畫
- 第八編……ネルソン　全壹册　法學士島田文之助君著　北蓮藏君畫
- 第九編……岳飛　全壹册　文學士笹川臨風君著　渡邊金秋君畫
- 第拾編……コロンブス　全壹册　法學士桐生政治君著　白瀧幾之助君畫
- 第拾壹編……ガリバルヂー　全壹册　法學士岸崎昌君著　中村不折君畫
- 第拾貳編……彼得大帝　全壹册　文學士佐藤信安君著　宮川春汀君畫
- 第拾參編……華盛頓　全壹册　文學士福山義春君著　山中古洞君畫
- 第拾四編……孔明　全壹册　法學士安藤俊明君著　高橋松亭君畫
- 第拾五編……ソクラテス　全壹册　文學士久保天隨君著　中村不折君畫
- 第拾六編……グラッドストン　全壹册　法學士近松宇太郎君著　中村不折君畫
- 第拾七編……歴山大王　全壹册　文學士幸田成友君著　中村不折君畫
- 第拾八編……王陽明　全壹册　文學士白河次郎君著　宮川春汀君畫
- 第拾九編……ガーフヰールド　全壹册　文學士酒井小太郎君著　中村不折君畫
- 第貳拾編……デモスセネス　全壹册　文學士十時彌君著　山中古洞君畫
- 第廿壹編……シエークスピーヤ　全壹册　法學士中村可雄君著　中川葦舟君畫
- 第廿貳編……ナポレオン　全壹册　文學士土井晩翠君著　中村不折君畫

## 續刊

- シーザー　文學士柿山清君著
- フランクリン　文學士熊谷五郎君著
- 文天祥　文學士高城萬助君著
- キヤピテンクック　法學士谷野格君著
- コロンウヰル　法學士松岡國雄君著
- ヂンギスカン　法學士大田三郎君著
- 孟子　法學士永井惟直君著
- メッテルニッヒ　法學士志村義磨君著
- クリスピー　法學士各尾良辰君著
- 虞蘭得　法學士布施謙太郎君著

正價　壹册金拾參錢〇六册前金七拾錢〇拾貳册前金壹圓參拾錢〇貳拾五册前金貳圓六拾錢〇全部五拾册金五圓〇

全部　郵税壹册金四錢宛

五拾册洋裝菊判〇毎號著名學士大家執筆〇和洋有名畫伯精密挿繪〇御注文都て前金

發兌元　東京日本橋區本町三丁目八番地　博文館

# 十科理

石井研堂君著（全部十二冊）

○第壹月 新風船　正月の御遊びは紙鳶と羽子などでありますが、此新風船は愉絶快絶、破天荒の新案です

○第貳月 雪達摩　六花紛々たる時に當りて、幼少年諸君の御遊びは雪達摩を作るより面白き事はなし、本書の面白味は此れに勝ること萬々です

○第參月 花の錦　三月なれば花の錦の春めきて記事皆な無味の多きを占む香床きし好時節になん

○第四月 汐干狩　面白き汐干狩は此月第一の遊び本書も趣味津々として一讀卷を戯ふ能はざらしむ

○第五月 植物園　そろ〳〵草木も綠ならんとする此月植物園に於て百花の研究いと興あることならずや

○第六月 昆蟲網　さんぽや蝶を捕ふるぽつちやん方是非共本書を讀まなければなりません

# 二ケ月

定價一冊金拾錢○拾二冊金壹圓拾錢◎郵稅一冊四錢

○第七月 游泳臺　夏期に於ける游泳何ぞ其快なる何ぞ其愉なる、海國男子たるもの必ず一讀せざるべからず

○第八月 富士詣　地を拔く一萬二千尺健脚登山を試みて勇氣勃々快又快ならずや

○第九月 二百十日　年中第一の厄日一年の國勢に大なる關係あり用心して見よ

○第拾月 銃獵者　兎を山林に獵り鳥を原野に逐ふ其快其興中々口に言はれませぬ

○第拾壹月 燈會　山水の明なる風俗の宏なる教育上すべての物象を親しく目擊せらる妙なる哉

○第拾貳月 歸省錄　學業休暇なれば久振にて古鄉に歸り父母兄弟に逢ふて積る咄をせよ

# 新刊報告

## 中等教育 作文教科書

小宮山弘道君編

全壹冊洋裝菊判
紙數四百四十頁
正價金四拾錢
郵稅八錢

本書は主として中等教育に入りたる學生の爲めに編著せらる、凡そ初學文を作らんとするに、文字未だ富贍ならざるため、思想を表現するに當りて、筆端窘束の憾なき能はず。仍て本書は之を救はんが爲に部門を分ちて熟語連句、練習問題、及び作例を掲げたれば、之に習熟せば自己の思想を自由に發抒することを得べし

## 删定徒然草

大和田建樹君删定
佐藤寛君校訂

全壹冊洋裝菊判
正價金拾八錢
郵稅六錢

文部省檢定濟

兼好法師の徒然草は其文の妙、想の奇を以て久しく世間に傳承せらるゝ所なるが、本書は中等教育の用書に充てんが爲に、風教を害し、もしくは宗教に僻したる個條を删り、叙事と論說と二類に分ちて、所々の頭書を加へたれば、亦以て好個の家庭讀本に供すべし

發兌元 東京 博文館

---

# 內外遊戲全書

健全なる精神は健全なる身體に存すること實に精神身體の保育は須らく兩々相並行せしめざる可からず殊に學生の體軀健全活潑ならざれば中途に廢學する虞あるのみならず往々夭折の不幸を見るあり今や內外遊戲全書の出づる豈に偶然ならんや

全部拾五冊完結

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第壹編 | 端艇競漕術 | 法科大學 | 遠山熙君著 |
| 第貳編 | 新游泳術 | 法科大學 | 稻田實君著 |
| 第參編 | ベースボール、グリッケット | 工科大學 | 津田素彥君著 |
| 第四編 | 射的術及弓術 | 工科大學 | 津田素彥君著 |
| 第五編 | 銃獵案內 | 農科大學 | 佐野信三郎君著 |
| 第六編 | 庭球突走術 | 工科大學 | 野田圭園君著 |
| 第七編 | 玉上競技法 | 法科大學 | 三宅鐵骨君著 |
| 第八編 | 陸上競技法 | 農科大學 | 志岐守二君著 |
| 第九編 | 鳥獸狩獵法 | 農科大學 | 志岐守二君著 |
| 第拾編 | 室內遊戲集 | 農科大學 | 志岐守二君著 |
| 第拾壹編 | 昆蟲採集術 | 農科大學 | 安藤謙吉君著 |
| 第拾貳編 | 漁魚術 | 中洲 | 滿尾藤次郎君著 |
| 第拾參編 | 馬引車 | 法科大學 | 遠山熙君著 |
| 第拾四編 | 福自轉車 | 農科大學 | 安藤謙吉君著 |
| 第拾五編 | 蹴鞠集 | 法科大學 | 三井末彥君著 |

正價（壹冊金拾貳錢●六冊前金六拾六錢●拾貳冊前金壹圓貳拾五錢●郵稅一冊金四錢●御注文前金

袖珍美本

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

# 俳諧文庫

全部貳拾四册　毎月一回發行

## 改定正價

●壹册金參拾錢●六册金壹圓●七拾錢●拾貳册金參圓參拾錢●貳拾四册金六圓參拾錢●郵稅壹册八錢

## 全部

- ●第壹編……芭蕉以前俳諧集……永機、雪人校
- ●第貳編……芭蕉以前俳諧集　上……大野酒竹校　下……大野酒竹校
- ●第三編……芭蕉以前俳諧集……永機、雪人校
- ●第四編……其角六集……大野酒竹校
- ●第五編……許有全集……岡野知十校
- ●第六編……也雪全集……雪中庵雀志校
- ●第七編……嵐雪全集……永機、雀志校
- ●第八編……支考……晋雪庵柳崖校
- ●第九編……蕉門十哲……大野酒竹校
- ●第拾編……元禄名家句集……岡野知十校
- ●第拾壹編……一茶大江丸全集……大野酒竹校
- ●第拾貳編……蕪村暁臺全集……巖谷小波校
- ●第拾三編……俳諧論……巖谷小波校

博文館

## 目次

- ●第拾四編……素堂鬼貫全集……大野酒竹校
- ●第拾五編……續俳諧論集……巖谷小波校
- ●第拾六編……俳句合全集……角田竹冷校
- ●第拾七編……蓼太全集……梅年、雀志校
- ●第拾八編……俳諧珍本文庫……大野酒竹校
- ●第拾九編……俳諧逸話……巖谷小波校
- ●第貳拾編……俳諧付合作法……鵜澤四丁校
- ●第廿壹編……俳諧類題……伊藤松宇校
- ●第廿貳編……俳諧類題句集　上……尾崎紅葉校
- ●第廿三編……俳諧類題句集　下……尾崎紅葉校
- ●第廿四編……俳諧紀行全集……佐藤飯人校

發兌

**謹告**　俳諧文庫は今や俳諧紀行全集を以て全部完成を告げんとす古哲の編著多く名山に藏莽せられんとするものを廣捜傍探し皆校訂を經たり以て俳家儿上唯一の珍とするに足れり而して近來物價騰貴の趨勢につれ紙價其他の原費悉く上騰し無比の廉價なる本書の如きは到底舊來の價格を保持し難く依て四月一日より前記の通改正仕候間江湖諸君願くは之を諒し陸續御購讀あらんことを

# 續近世百傑傳

干河岸櫻所君編撰

全壹冊洋裝・豪華珍紙數大凡六百頁正價金四十錢四月上旬發兌

## 續百傑傳人名

○長沼澹齋　○秋山伊助　○宇田川槐園　○西山拙齋　○前野蘭化
○皆川淇園　○泉豐洲　○桂川月池　○那波綱川　○廣津臺山　○中井竹山
○間長涯　○山東京傳　○中井履軒　○杉田玄白　○式亭三馬　○頼春水
○賴春風　○山梨稻川　○市野迷菴　○大槻磐水　○平山行藏　○太田南畝
○大野拙齋　○宇田川榛齋　○中島子玉　○狩谷掖齋　○古賀穀堂　○松平冠山
○松本寒緑　○麻島松南　○林述齋　○川西士龍　○猪飼敬所　○長野豐山
○齋藤鑾江　○佐藤信淵　○高野長英　○岡本花亭　○篠崎小竹　○古賀侗庵
○山岡八十郎　○八尾正朋　○鳥山義所　○釋月性　○頼古狂生　○帆足腰髀
○三條實萬　○大久保要　○堀織部正　○吉田東洋　○中島晴虎　○茅根伊豫介
○清川正明　○緒方洪庵　○間崎則正　○藤本鐵石　○多田海庵　○來原盛功
○世良脩藏　○宮部鼎藏　○眞木和泉　○川連虎一郎　○大久保忠敎　○錦小路頼德
○小川靖齋　○中村無二　○武市半平太　○戸田銀次郎　○高島秋帆　○增井北洋
○釋胤康　○池藏太　○木下韡村　○月形洗藏　○草場佩川　○川瀨太宰
○川路聖謨　○和田三兵衛　○高橋正助　○半牧方士　○吉田守隆　○水筑佩絃
○玉松操　○田口文藏　○山口兵武　○渡邊樵山　○林鶯溪　○植原靜淵
○山寺常山　○那珂梧樓　○井口晋作　○菊地海莊　○大卿學橋　○鹽谷簞山
○古賀茶溪　○山中靜逸　○小永井小舟　○林鶴梁　○成島柳北

發兌元　博文館

---

洋裝菊判美本

# 少年讀本

全部五拾冊　每月壹回發行

壹冊百冊頁除

著名文學大家執筆　有名和洋畫伯挿畫

1 高島秋帆（年方畫）　福地櫻痴君著　再版
2 白河樂翁公（永洗畫）　中邨秋香君著
3 河井繼之助（半古畫）　戸河殘花君著
4 三條實美公（廣業畫）　依田學海君著
5 曲亭馬琴（觀山畫）　驛路黙軍村君著
6 井伊掃部頭（沖舟畫）　巖谷小波君著
7 山田長政（春草畫）　桐生悠々君著
8 錢屋五兵衛（永洗畫）　岸上質軒君著
9 春日局（春草畫）　遲塚麗水君著
10 水戸烈公（大觀畫）　野口珂北君著
11 桐野利秋（巢堂畫）　春山鶴峯君著
12 藤田東湖（不折畫）　大和田建樹君著
13 伊能忠敬（永洗畫）　幸田露伴君著
14 新井白石（敬中畫）　武島羽衣君著
15 水野越州（永興畫）　中村桂軒君著
16 池大雅（觀山畫）　山花參君著
17 木内宗吾（春汀畫）　松原廿三階堂君著
18 西郷隆盛（年方畫）　川崎紫山君著
19 阪本龍馬（年方畫）　坂崎紫瀾君著
20 横井小楠（不折畫）　大野洒竹君著
21 貝原益軒（春汀畫）　石原芳堂君著
22 渡邊崋山（年峯畫）　渡邊霞亭君著
23 中濱萬次郎（耕溪畫）　石井研堂君著
24 近衛忠熙（不折畫）　勢多章之君著
25 間宮倫宗（松亭畫）　文學士笹川臨風君著（古洞畫）
26 周布政之助　堺枯川君著
27 荻生徂徠（蓁舟畫）　内田魯庵君著
28 松平定信（華邨畫）　森山吐虹君著
29 中江藤樹（弘光畫）　國府犀東君著（古洞畫）
30 島津齊彬（春汀畫）　春山鶴峯君著
31 高野長英（蓁舟畫）　千河岸櫻所君著
32 桐生悠々君著　橋本左内

## 釋月性

宮川春汀君畫

正價金拾三錢　郵稅四錢

干河岸貫一君著（第參拾參編）

周防大島郡妙圓寺住職月性師は吉田松陰の親友にして僧中の豪傑也勤王詩幕論者也說敎家としては防長を風靡し護法家としては佛敎を活用したり是等種々の方面より師の性行を觀察し其逸事を揭ぐ

正價　前金壹冊拾三錢　六冊金七拾錢　十冊金壹貳冊拾五錢　郵稅壹冊四錢　圓三錢

發兌元　東京日本橋區三丁目　博文館